

IV 分析報告

太田原高州遺跡出土ガラス玉の材質調査

田村朋美（奈良文化財研究所）

はじめに

太田原高州遺跡から2点のガラス玉が出土している（香川県教育委員会 2017）。これらのガラス玉について蛍光 X 線分析による材質調査を実施した。その結果について報告する。

1 資料の概要

調査対象とした資料は、太田原高州遺跡出土のガラス製トンボ玉1点（No.392）および単色のガラス小玉1点（No.292）である（写真 31）。トンボ玉は紺色透明の母玉の側面に黄色ガラスで斑点紋が施されている。斑点紋は4ヶ所施されていたようであるが、このうち1ヶ所についてはガラスが失われており、母玉に窪みのみが残る。ガラス小玉は、緑色透明を呈するもので、比較的保存状態は良好である。巻き付け法で製作されていると考えられる。

2 調査の方法

ガラス玉の材質調査には蛍光 X 線分析を適用した。測定結果は、測定資料と近似する濃度既知のガラス標準試料を用いて補正した理論補正法（FP 法）により、検出した元素の酸化物の合計が 100% になるように規格化した。測定に用いた装置は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（エグックス社製 EAGLE III）である。励起用 X 線源はモリブデン（Mo）管球、管電圧は 20 kV、管電流は 100 μ A、X 線照射径は 112 μ m、計数時間は 300 秒とし、真空中で測定した。

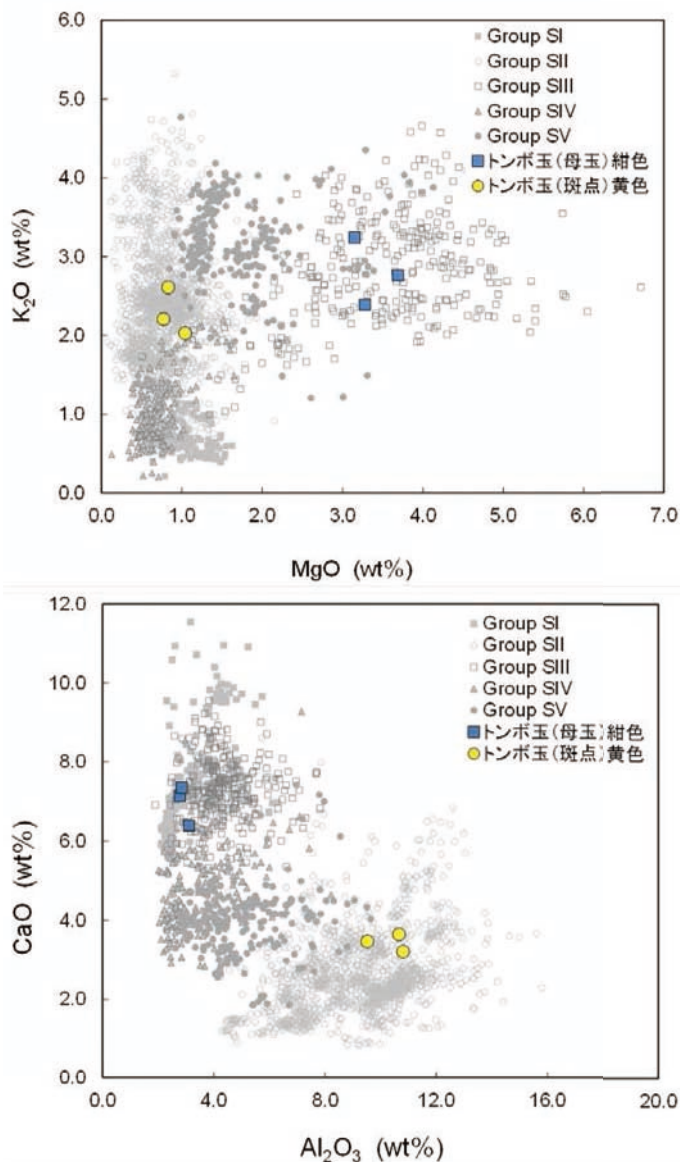
3 結果と考察

トンボ玉（No.392） 蛍光 X 線分析の結果を第 23 表に示す。母玉部分について 3 箇所測定した結果、 Na_2O を 12.9-16.3% 含むソーダガラスであった。ソーダガラスはナトリウム（Na）を融剤とするガラスであり、 MgO 、 K_2O 、 CaO 、 Al_2O_3 の含有量から、5 種類に細分される（Group S I ~ S V）（Oga and Tamura 2013）（第 27 図）。トンボ玉の母玉部分について、これらの既往グループへの帰属を検討した結果、植物灰タイプのソーダガラス（Group S III）に相当するものであった。Group S III は、低 Al_2O_3 高 CaO のソーダガラスのうち、 MgO と K_2O の含有量が 1.5% よりも多いもので、ソーダ原料に植物灰を利用したと考えられているガラスである。日本列島で流通した Group S III のガラス小玉については、製作技法と化学組成および流通時期から、さらに Group S III A、S III B、S III C に細分される。トンボ玉の母玉部分については、測定箇所によって化学組成にばらつきが認められたが、 MgO と K_2O の含有量は、Group S III B のばらつきの範囲と重複する。Group S III B は、そのほとんどが引き伸ばし法による紺色ガラス小玉であるが、本資料の着色剤の特徴も、引き伸ばし法で製作された典型的な Group S III B と共通する。すなわち、主要な着色成分はコバルト（ CoO : 0.5-0.10%）であり、コバルト原料の不純物と考えられる酸化マンガン含有量が少なく（ $\text{MnO} < 0.5\%$ ）、酸化銅（ CuO ）および酸化鉛（ PbO ）

を 0.1%前後含有する。以上のことから、本トンボ玉の母玉の製作には、製品として舶載され大量に流通していた引き伸ばし法による Group S III B の紺色ガラス小玉を二次的に利用したと考えられる。

一方、トンボ玉の斑点部分は、高アルミナタイプのソーダガラス (Group S II) であった。Group S II は着色剤や流通時期から Group S II A と Group S II B に分けられるが、本資料の黄色斑点はすべて Group S II B に帰属するものであった。錫 (Sn) および鉛 (Pb) が検出されており、人工の黄色顔料である錫酸鉛 (PbSnO_3) による着色である。このような材質の黄色不透明ガラスは、引き伸ばし法による典型的なインド・パシフィックビーズとして日本列島で大量に流通していたことが知られる。すなわち、本資料の斑点部分は、このようなガラス小玉の破片を象嵌した可能性が高い。

ガラス小玉 (No.292) 蛍光 X 線分析の結果、酸化鉛 (PbO) を 59.47% 含有する二成分系の鉛ガラスであった。着色は微量に含まれる銅 (CuO : 0.31%) によると考えられる。日本列島では、古墳時代後期末 (TK209 期) に同種の鉛ガラス小玉が北部九州を中心に流入することが明らかとなっている。



第 27 図 化学組成によるソーダガラスの細分
(上: MgO - K_2O 含有量、下: Al_2O_3 - CaO 含有量)

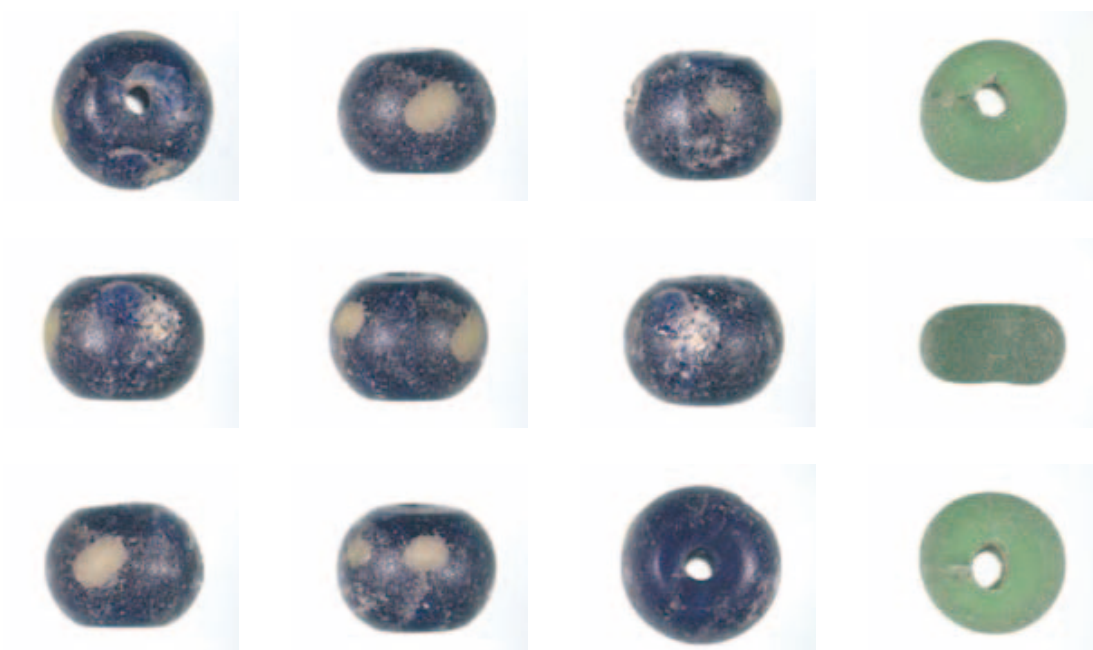
参考文献

香川県教育委員会 2017『太田原高州遺跡 2』(『県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』) 香川県埋蔵文化財センター編

Oga, K., Tamura, T. 2013. Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical Compositions, Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in Yayoi-Kofun Period (3rd Century BCE-7th Century CE). Journal of Indian Ocean Archaeology, 9.

No	色調	重量濃度 (%)																
		Na ₂ O ₃	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	PbO	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂	SnO ₂
392	紺色母玉 1	16.3	3.7	3.1	65.5	0.3	2.8	6.4	0.19	0.15	1.32	0.05	0.08	0.05	0.01	0.04	0.06	
	紺色母玉 2	13.4	3.3	2.8	68.3	0.3	2.4	7.1	0.22	0.19	1.65	0.09	0.10	0.09	0.03	0.06	0.05	
	紺色母玉 3	12.9	3.2	2.9	67.7	0.3	3.2	7.3	0.23	0.19	1.66	0.10	0.12	0.08	0.02	0.07	0.16	
	黄色斑点 1	16.6	0.8	10.8	63.4	0.1	2.2	3.2	0.32	0.04	1.28	0.02	0.01	0.73	0.00	0.04	0.09	0.31
	黄色斑点 2	13.1	1.0	9.5	65.2	0.1	2.0	3.5	0.56	0.10	2.60	0.05	0.05	1.63	0.00	0.08	0.19	0.26
292	緑色透明			0.8	39.1						0.30		0.31	59.47				

第 23 表 蛍光 X 線分析結果



No.392

No.292

写真 31 ガラス玉の顕微鏡写真 (倍率不同)

V 調査研究

【資料紹介】香川県内出土の有舌尖頭器について2

蔵本 晋司

筆者は以前、香川県内出土の有舌尖頭器の集成作業を行った(蔵本2016)。旧稿では、発掘調査資料を中心に、若干の表採資料を集め、32遺跡39点の資料を集成した。今回は、その後に出土が確認された資料を紹介する。

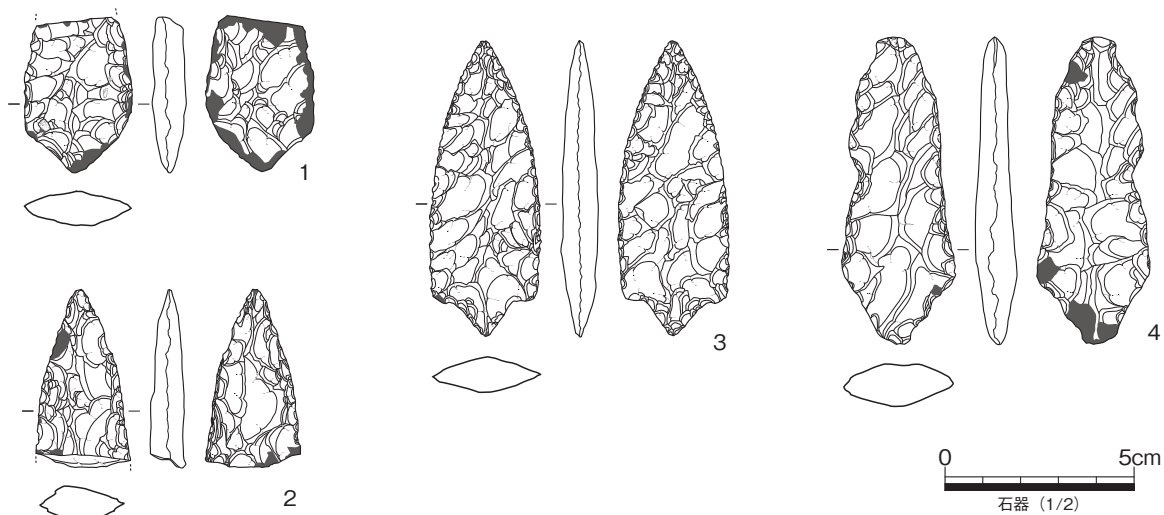
1は、当センター所蔵資料で安藤文良氏旧蔵資料である。図右面に「昭26/2/7」と採集年月日が墨書される。上半部を折損し、周辺部にも新しい剥離が多くみられる。また、表面はやや強く磨滅しており、地表面に長く露出していたものを安藤氏により採集された資料と考えられる。出土地は不明だが、石材はサヌカイトであり、安藤氏旧蔵資料は香川県内出土の資料が大半を占めることから、本資料も県内出土資料である可能性が高い。大型もしくは中型で、基部尖基式、身部外彎形態を呈する。

2～4は、坂出市鼓岡文庫所蔵資料である。2は、基部を欠損する小片であり、有舌尖頭器とは必ずしも断定はできない。出土地不明である。3は、ほぼ完存

の資料で、「フ中」と白色絵具で注記がなされており、坂出市府中町周辺の出土資料の可能性はある。大型で、基部平基、身部外彎形態を呈する。4も、ほぼ完存の資料だが、表面の磨滅が顕著である。「フ中」の注記があり、綾川河床での採集資料の可能性が高い。大型で、基部尖基式、身部直線形態だが、磨滅が顕著であり本来の形態が残されていない可能性がある。

今回、点数は限られるが県内出土資料の追加を行った。鼓岡文庫所蔵資料は、これまで出土が知られていない地域の資料であり、詳細な出土位置は不明ながらも、その価値は高いものと考ええる。今後とも資料の集成をさらに進め、課題となっている周辺地域の資料との比較検討なども行っていきたい。

蔵本晋司2016「香川県内出土の有舌(茎)尖頭器について」『県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 十川東・平田遺跡』、香川県教育委員会



第28図 有舌尖頭器実測図

番号	出土地	計測値 (cm・g)				材質	残存	備考
		現存長	最大幅	最大厚	重量			
1	不明	4.04	2.84	0.88	11.58	サヌカイト	上半部折損	安藤文良氏旧蔵資料 (EAD0617)
2	不明	4.67	2.50	0.93	9.34	サヌカイト	下半部折損	鼓岡文庫所蔵資料
3	不明 (フ中)	7.78	2.85	0.92	20.27	サヌカイト	ほぼ完存	鼓岡文庫所蔵資料
4	不明 (フ中)	8.05	2.99	1.05	23.75	サヌカイト	一部折損	鼓岡文庫所蔵資料

第24表 有舌尖頭器観察表

【資料紹介】手島沖海揚がりの南九州系弥生土器について

竹内 裕貴

はじめに

香川県内に限らず瀬戸内の各地域では、海から考古資料が偶然に引き揚げられることがある。それらは縄文時代～現代までの海上や沿岸部での生活のなかで海中に沈んだ資料である。

海揚がり資料は、不時に発見され、遺構に伴うような場合は少ないため、その遺物の評価が十分にされることは少ない。

今回は、香川県で見つかった海揚がり資料の中で、弥生時代中期の南九州系の土器について報告し、周辺地域の事例も合わせ評価を行いたい。

なお、今回紹介する資料については、瀬戸内海歴史民俗資料館が、かつて海揚がり考古資料の調査を行い、その際に報告がなされていた資料（真鍋 1991）の一部であり、同館にて保管されていたが、近年香川県埋蔵文化財センターに移管された資料である。

1 資料の来歴

今回扱う手島沖海揚がり資料（以下、本資料と称する）については、瀬戸内海歴史民俗資料館が瀬戸内海を中心とした海揚がり資料の調査を実施した際に収集されたものである。

調査報告や調査担当者への聞き取りを参考にすると、丸亀市手島での踏査時に、島の北東部に在の方が

所有していたものであり、その親族が以前に近場の海で発見したという話を聞き取っている。第 29 図に示した当時の報告（真鍋 1991）において落とされているポイントの位置で引き揚げられたということは間違いなく、後述するが海底での潮流による二次移動も最小限のものであったと考えられる。

2 資料の詳細と編年的位置づけ

本資料は、海から揚がった際の状況等詳細が不明な点も多いが、ほぼ完形の状態で、数百 km ほど離れた地域からの搬入土器がみつかることには何かしらの意義があると考えられる。

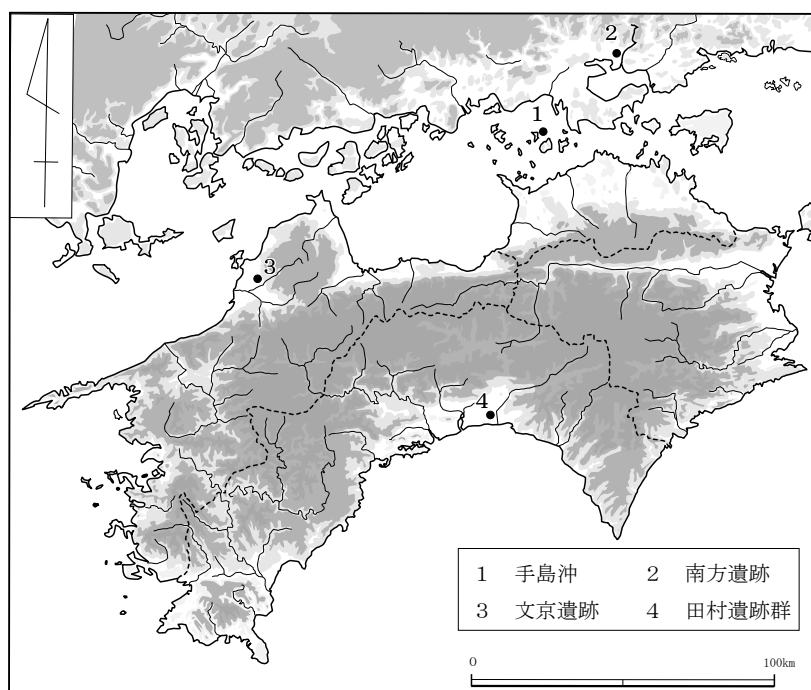
そこで、まず本資料を再実測し、その際に観察した所見をまとめ、故地である南九州の編年に照らし合わせてできる限りの年代決定を行いたい。

(1) 資料の詳細について

まずは資料の基本的な情報を整理しておく（第 30 図・写真 32）。

器種は壺である。胎土は黄褐色を呈し、砂粒が在地の弥生時代中期の土器と比べ多い。特徴的な鉱物を顕著に含むことはないが、円摩しているものがみられる。

ほぼ完存し、器面の残りは比較的良好である。部分的に器面の荒れや貝類の付着がみられる部分もあるが、その範囲は土器を縦に分けた半分の範囲に偏る。



第 29 図 関連遺跡地図



第30図 手島沖海揚がり南九州系土器 実測図

底部を下にして、斜めに倒れた状態で上面のみ摩滅したような残存状況である。

つまり、完形の状態海中に落ちたのち、場所をほとんど変えずに手島沖にあった可能性が高いといえる。

法量は、口径は17.6 cm、器高40.2 cmを測る。胴部最大径は中位よりもさらに上がった位置にあり、肩が張るような形態を持つ。胴部最大径から底部にかけて、あまり膨らみを持たずにすぼまる底部を持ち、肩部に3条の微隆起突帯を貼り付けている。突帯貼付けに際して、その接合痕を消すためのヨコナデなどは行われていない。口縁部は、やや外反する口縁に、断面台形の粘土帯が垂れ下がるように貼り付く。口縁端部は、強いナデ調整により、ややくぼんだ状態となる。

調整は、内外面にハケが確認でき、内面は横方向。外面は縦方向のハケ目が確認できる。胴部最大径付近を境に調整の方向に変化がみられ、下半は縦方向、それ以上は緩い左上がりのハケを施す。

以上が土器の特徴であるが、全体のプロポーシオンや製作技法、胎土をみても近隣の地域に類例を見出すことはできない。類例として南九州に同様の形態の特徴を持つ資料が多く、黄色系の胎土の特徴から考える



写真32 手島沖海揚がり南九州系土器

と、産地は大隅や薩摩といった鹿児島県域ではなく、日向のものと推定される。

(2) 編年的位置づけについて

以上のことから、本資料を南九州における弥生時代中期の土器編年に拠って時期比定を行う。

南九州における弥生土器編年は、鹿児島県域を中心に河口貞徳によってその基礎が築かれている(河口1981)。

その後、従来から指摘されていた変遷感や他地域との並行関係、さらには南九州の中での地域色を踏まえた編年がなされ、中園聡は外来系の土器様式での変遷ではなく、在地土器の系統を整理したうえで様式を抽出し、型式分類と一括資料による対比を行い、南九州における編年を整理した(中園1997)。また、田崎博之も、九州島全体と、瀬戸内の並行関係をふまえつつ編年観を示している(田崎1998)。

本稿では、中園編年に従って本資料の位置づけを行いたい。

まずは土器の全体形状についてであるが、胴部最大径が上位にあたり、やや肩が張る形態をもつこと、肩部に3条の三角突帯を貼り付けること、外反したのちに、垂れ下がり気味に伸びる口縁部を持つことから、

中園分類の壺 C,D の 1 型式に類似する。

編年に照らし合わせると、入来Ⅱ式に位置づけられ、中園編年では中期前半と表記され、おおむね中期中葉の年代観が考えられる。

先ほどの胎土の検討から、日向からの搬入であると考え、故地における同時期の資料としては、前原北遺跡 SA39 出土土器に類例を求めることができる。

3 瀬戸内海における南九州系土器の出土とその特徴

香川県内では、当該期に南九州からの搬入土器は確認されていない。他の地域に目を向けると、瀬戸内海沿岸においては、弥生時代中期の例として、岡山県南方遺跡（岡山市教育委員会 2005・2017、中園ほか 2015）

のほか、いくつかの事例が知られている。

今回は、本資料の位置づけのために周辺地域の状況を整理し、当時の交流関係を考えたい。

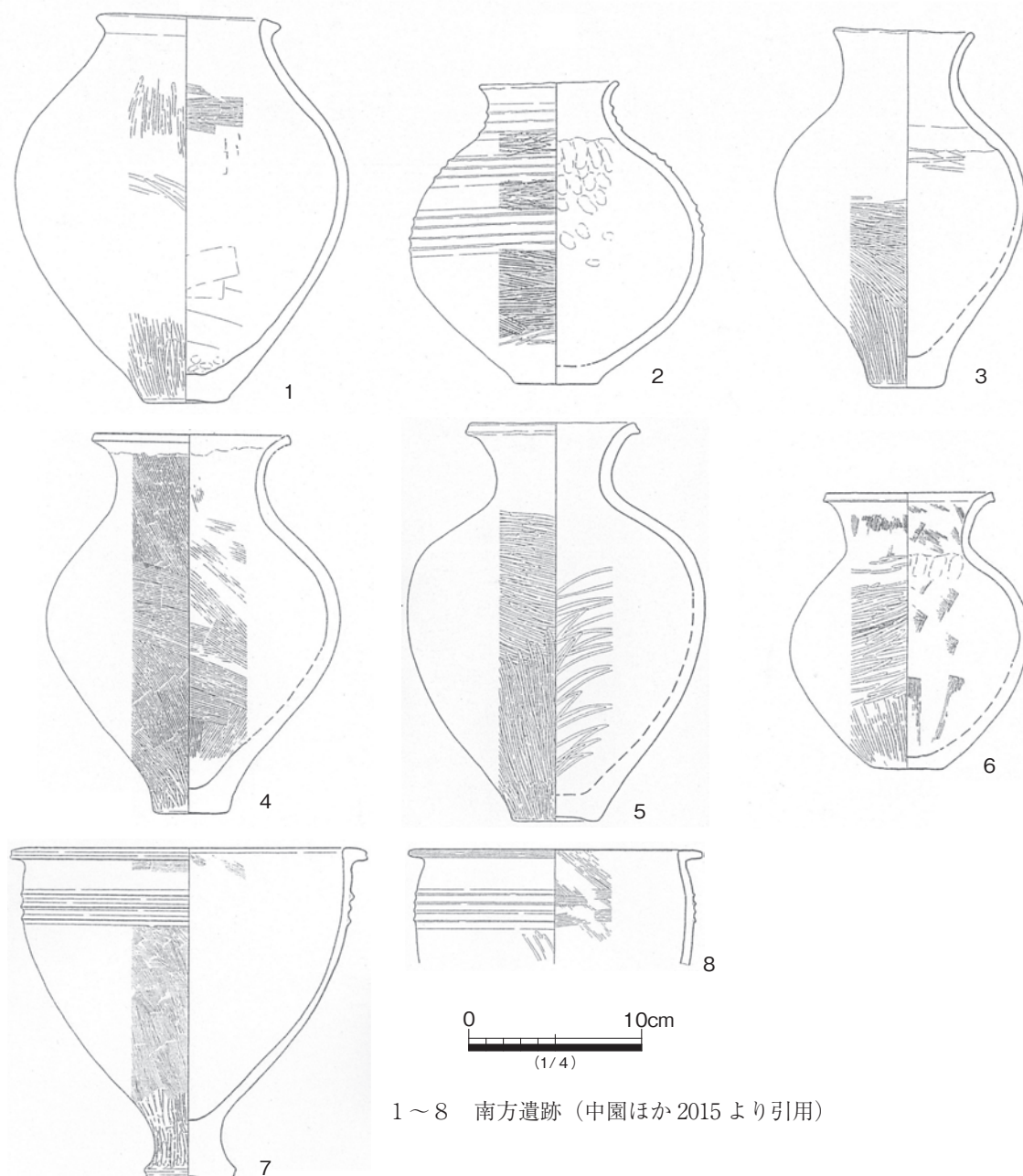
(1) 南方遺跡（第 31 図）

岡山市南方等に所在する遺跡である。

弥生時代中期において複数地域からの土器の搬入が知られているが、その中でも最も遠い距離からの搬入が南九州からの搬入である。

南九州系の土器が出土する地点は集中しており、その数量は調査全体で数十点ほど確認できる^(註1)。また、土器のほかにも南島製産の貝製品の出土がみられる。

南方遺跡の資料について形態の検討と胎土分析を行った中園聡は、形態・胎土の分析から、南九州系と



1～8 南方遺跡（中園ほか 2015 より引用）

第 31 図 南方遺跡 南九州系土器

位置づけられていた土器群では、大隅及び日向からの搬入が目立ち、時期については本資料と同じ入来Ⅱ式が主体であるとしている（中園ほか2015）。

南九州系の土器と貝製品の制作にかかわる痕跡から、中園は、九州東岸を経由する「東の貝の道」からもたらされたものである可能性を想定している（中園ほか2015）。搬入されている器種については、壺・甕の2種類であるが、壺については、いくつかの形態のものもたらされており、このほか、東九州系の下城式の壺や、須玖式の壺なども認められる。

(2) 文京遺跡（第32図）

文京遺跡は、松山市文京町に所在する。弥生時代中期～後期を中心とした大規模な集落遺跡であり、これまでの調査のなかでも、16次調査において、多くの南九州系土器の出土が認められた（愛媛大学埋蔵文化財調査室2013・2014）。南九州系土器の中には胎土が黒褐色系で、金雲母を含むものも見られることから、大隅からの搬入土器が一定数入る可能性が高い。

これらの土器の時期については、形態からみても弥

生時代中期後葉の山ノ口式が大半である。これは共伴する在地の土器の時期ともおおむね整合している。

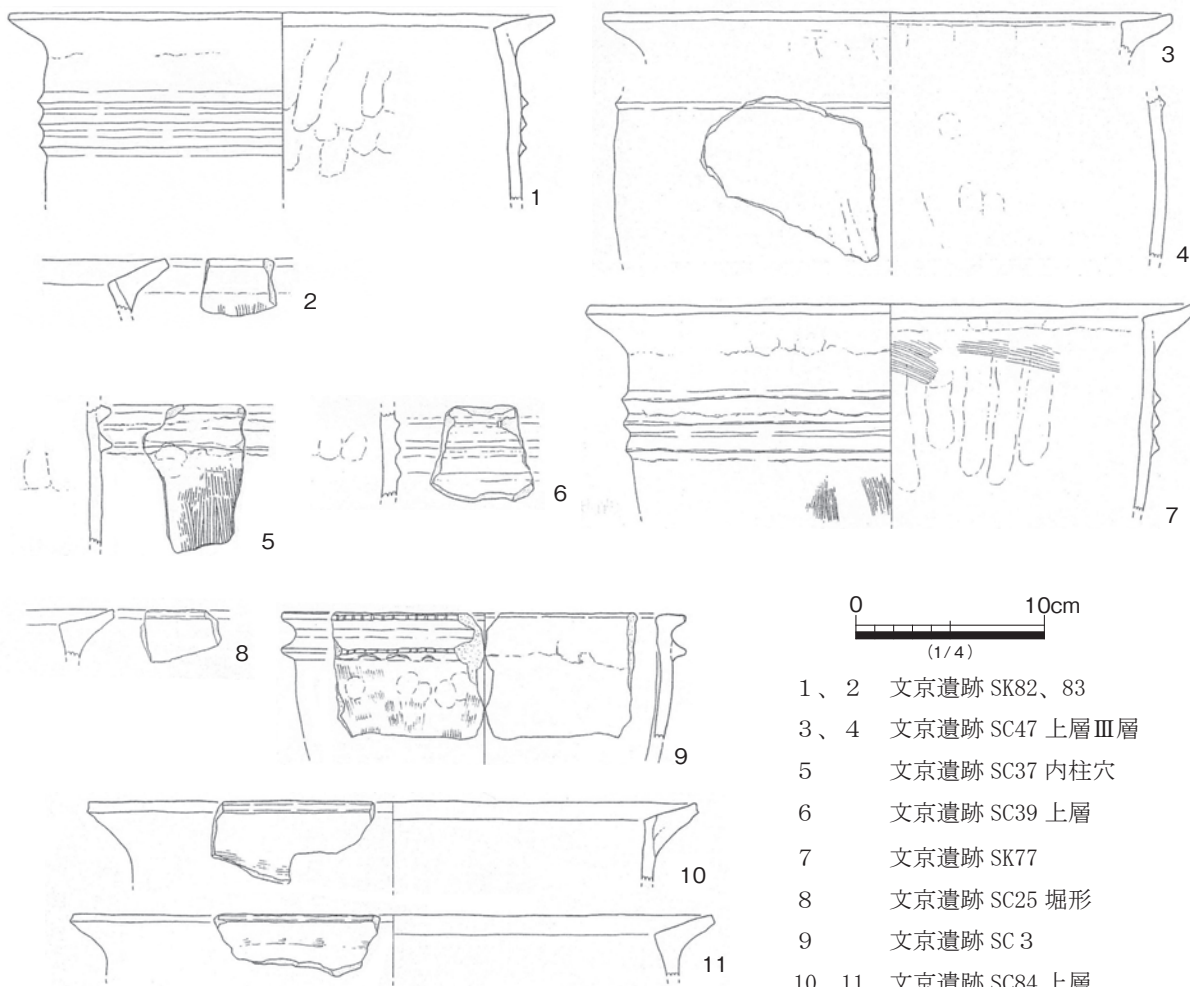
中期後葉に土器の搬入が目立つことが特徴といえ、従来指摘される瀬戸内と南九州の交流が活性化する時期と同じ段階の土器搬入といえる。

(3) 田村遺跡群（第33図）

南国市田村に位置する、弥生時代前期～後期までの高知平野における拠点的な集落である。弥生時代中期～後期前半に集落は最盛期を迎えるが、他の地域からの土器の搬入については後期に少数認められるほかは少ない。南九州系の土器は4点確認されており、いずれも一括性の高い遺構からの出土である。

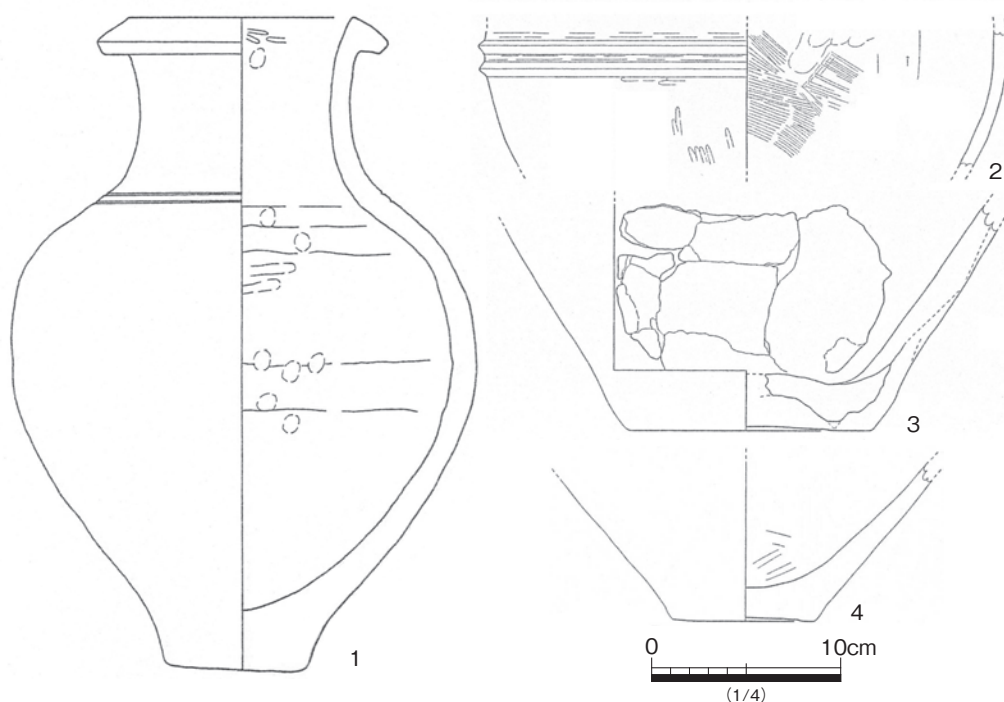
器種は壺であり、1点がほぼ完形に復元できる。共伴する土器の年代観からは、出原恵三氏の編年（出原2000）でいうⅢ-3～Ⅳ期に近い年代観が考えられる。

在地の編年や他地域との並行関係については課題が残るものの、南九州系土器の年代からは、入来Ⅱ式～山ノ口式の年代が想定される。胎土は、大隅半島に近い黒色の胎土をもち、角閃石を含むものもある一方、



- 1、2 文京遺跡 SK82、83
- 3、4 文京遺跡 SC47 上層Ⅲ層
- 5 文京遺跡 SC37 内柱穴
- 6 文京遺跡 SC39 上層
- 7 文京遺跡 SK77
- 8 文京遺跡 SC25 堀形
- 9 文京遺跡 SC 3
- 10、11 文京遺跡 SC84 上層

第32図 文京遺跡 南九州系土器



1 田村遺跡群 E6 SX601 2～4 田村遺跡群 SK10

第33図 田村遺跡群 南九州系土器

第33図—1に関しては、黒褐色の胎土を持つものであり大隅半島と類似しない点も多く、確実な搬入品とはいえない。形態をみると本資料に形態的には似る南九州系の土器である。

弥生時代中期後葉以降には、南四国の土器が南九州にて見つかる事例もあり、搬出入の中心は中期後葉以降にある可能性が高い。

4 本資料の位置づけについて

周辺の状況をふまえたうえで、改めて讃岐の状況を考え、本資料にかかわる当該期の南九州との関係について検討してみたい。

(1) 讃岐における弥生時代中期の搬入土器について

讃岐における弥生時代中期の搬入土器は決して多くない。さらに、その大半が瀬戸内海沿岸の地域からの搬入である。

時期についても、遠距離からの搬入含め他地域からの土器の搬入がある程度みられるのは弥生時代後期からである。中期の資料が平野部でまとまって確認できる事例が比較的少ないという事情もあるが、それに比べても中期の搬入量は少なく、中期中葉は特に不明瞭な点が多い。

(2) 瀬戸内－南九州の交流の変化

南九州系の土器の出土状況や、その故地などを比べ

てみると、瀬戸内海沿岸およびその周辺への土器の搬入が中期中葉～後葉においてみられる。ただし、讃岐、吉備における搬入と、伊予、土佐における搬入については、土器に見られる交流が確認できる時期がわずかにずれていること、搬入される土器の故地が若干異なること、双方向的な交流関係が確認できることが差異として挙げられる。

この2時期の交流のうち、特に中期中葉の交流関係について考えてみたい。

中期中葉は、南方遺跡の南九州系土器の検討（中園ほか2015）から指摘されるように、南島産の貝の入手に代表されるような南九州との長距離の交流関係があったとされる。この2地域間には、現在のところ間をつなぐような資料や遺跡が中間には確認されていないため、かなり点的かつ直接的な交流である可能性が高い。なお、貝製品については、香川県内にも少量ではあるが出土が確認される^(註2)。実態としては南方遺跡とその周辺が交流の中心地となっており、東部瀬戸内の四国側にはどれほどの影響があったかは現時点では断言できないが、南方遺跡への交流ルートから派生して南九州からの文物が対岸である讃岐地域にももたらされていた可能性は否定できない。

なお、中期後葉については、それまでの交流関係とは全く違った交流関係がみられる。瀬戸内系の土器の南九州への流入といった現象は、その性格が今一度検

討されるべきであろうが、今回の検討では言及できなかった。ただし、中期中葉の交流の形態とは明らかに異なる。

5 おわりに

今回資料報告として、手島沖で引き揚げられた南九州系の土器の再報告を行い、これが入来Ⅱ式の壺で、故地から瀬戸内海を渡航中に海中に落下したものである可能性が高いとした。

また、周辺地域の類例を検討し、南九州系土器の中でも、瀬戸内における分布状況は、入来Ⅱ式が相当する弥生時代中期中葉に限ると南方遺跡とその周辺に集中することが再確認できた。

弥生時代中期後葉に活発化する西部瀬戸内と南九州の交流の前代に、長距離かつ点的な交流が存在しており、本資料は、瀬戸内海を経由する南九州との交流のルートや、その内容を考えるための資料となるだろう。

四国島内では、弥生時代中期後葉以降を中心として南九州系土器が確認されているが、それ以前の状況は不明な点も多い。

今後は南島産の貝製品だけではなく西方からの影響関係と土器の年代観の整理を行い、弥生時代中期の交流関係についても検証していきたい。

本報告にあたって、信里芳紀氏、乗松真也氏には、資料の来歴も含め、多くの指導と助言を受けた。なお、県外の資料の実見や評価については、扇崎由氏、久家隆芳氏にご高配とご助言いただいた。記して御礼申し上げます。

(註1) このほか、加茂政所遺跡などでも、少量ながら南九州系土器の出土がみられる。

(註2) 紫雲出山遺跡では、出土貝製品の中に、ゴホウラ製の貝製品が認められる。(木下 1996)

【参考文献】

- 石川悦雄 1984「宮崎平野における弥生土器編年試案一素描 (Mk. II)」『宮崎考古』第9号 宮崎考古学会
- 梅木謙一 2004「四国・南九州間における凹線文土器の交流」『西南四国—九州間の交流に関する考古学的研究』
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室 2014『文京遺跡Ⅶ—3 一文京遺跡 16次調査 A区—』
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室 2013『文京遺跡Ⅶ—4 一文京遺跡 16次調査 B区—』
- 岡山市教育委員会 2005『南方(済生会)遺跡 一木器編一』
- 岡山市教育委員会 2016『南方遺跡』第1分冊
- 岡山市教育委員会 2017『南方遺跡』第2分冊
- 岡山市教育委員会 2017『上伊福(済生会)遺跡3』

- 河口貞徳 1981「新南九州弥生式土器集成」『鹿児島考古』15 鹿児島考古学会
- 木下尚子 1996『南島貝文化の研究』法政大学出版局
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004『田村遺跡群Ⅱ』第3分冊
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター 2015『田村遺跡群Ⅲ』
- 田崎博之 1998「九州系の土器からみた凹線文土器の時間的位置」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』
- 出原恵三 2000「土佐地域」『弥生土器の様式と編年』四国編木耳社
- 中園 聡 1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類学研究』第9号
- 中園 聡 2004『九州弥生文化の特質』九州大学出版会
- 中園 聡・平川ひろみ・太郎良真妃・黒木梨絵・新屋敷久美子・若松花帆 2015「岡山市南方遺跡出土九州系弥生土器の蛍光X線分析」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 岡山市教育委員会
- 真鍋篤行 1991「瀬戸内海における海あがり考古資料調査報告(Ⅱ)」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』瀬戸内海歴史民俗資料館
- 三豊市教育委員会 2011『古代の三豊』
- 宮崎県教育委員会 1988『熊野原遺跡 A・B地区 前原西遺跡 陣ノ内遺跡 前原南遺跡 前原北遺跡 今江城(仮称)跡 車坂城西ノ城跡』
- 文化庁 2017『発掘された日本列島 2017 新発見考古速報』

香川県内出土の埴輪

蔵本 晋司

筆者は以前、香川県内出土の埴輪資料の集成を行い、編年上の見通しを示した（蔵本 2016・2017）。その過程で、当センター所蔵資料を中心に、未報告資料等の資料化を行ってきたが、諸般の都合ですべてを提示することができなかった。以下では、未報告の資料について実測図を公表し、本県の埴輪研究に資することとしたい。なお、法量や口縁部形態、突帯については、基本的に十河良和氏の分類案（十河 2003）に、外面2次調整の細分については、一瀬和夫氏の分類（一瀬 1992）に従って記述する。

今回掲載した資料はすべて当センター所蔵資料であり、後述する個人寄贈資料以外は、瀬戸内海歴史民俗資料館・香川県立ミュージアムからの移管資料である。

第34～36図は、大亀古墳群出土資料として当センターの台帳に登録されている円筒埴輪である。大亀古墳群出土資料については、旧稿において完形に復元される資料を含む116点について報告した。今回掲載する資料は、諸般の都合により前回報告できなかった資料で、内容的には旧稿の資料と大きな差異は認めない。いずれも無黒斑の土師質焼成で、焼成はやや甘いものが多い。色調は、大半が橙色系を呈するが、一部（18・21・25）はにぶい黄橙色を呈するものがあり、他の古墳の資料が混在している可能性がある。胎土は、いずれもやや粗粒の石英・長石粒を多量に含む。全体形状は不明だが、口径31.8～34.4cm、底径17.0～30.7cmに復元され、S型のみを認める。V群系の埴輪である。

1～3は口縁部の小片で、いずれも端部付近で緩やかに外反して開くⅡb類である。既報告資料では、Ⅲ類口縁が多数を占め外面調整はタテハケ、内面口縁部付近にヨコハケを施すものと、それを欠くものがある。4～18は胴部の破片である。胴部径36cm以下で、20cm前後に復元されるものもあるが、小片からの復元値のため誤差を含む。外面調整はタテハケ、内面は指オサエ・ナデ調整を施す。突帯は3b類を主体に、4b類を認める。著しく低平な資料はない。19～33は底部の小片である。底端部は指オサエ・ナデ調整されるものと、外面にヨコハケが施されるものがあるが、いわゆる底部調整を施したものはない。底部調整を施した資料は、旧稿（蔵本 2016）で1点（674）のみ認め、本来的に大亀古墳群では底部調整が少数派であったか、あるいは他の古墳の資料が混在した可能性が考

えられる。28・31では、底端部の2箇所粘土紐の接合痕を認める。

第37・38図は、出土地不明の資料である。34～37は須恵器片で、大亀古墳群出土とされる埴輪と同一コンテナに収納されていた。杯類はTK10型式併行期前後に位置付けられ、器台等も同時期として矛盾はなさそうだが、出土の経緯は一切不詳であり、同一古墳の資料とかどうかは断定できない。

38～66は、円筒埴輪・朝顔形埴輪の小片である。52を除いていずれも無黒斑の資料で、Ⅳ期以降と考えられる。38・39・47・64は、旧稿（蔵本 2016）において出土地不明資料として報告した資料（754～767）と、焼成、胎土、調整等が酷似し、同じ古墳出土資料と考えてよいものである。また、42・45・48・50・55～57・62・63・65は、焼成・胎土・調整等が上述した大亀古墳群出土資料と酷似し、おそらくは何らかの事情により、混在してしまった資料と考える。61には、「満濃／富熊神社西」の墨書があり、61と焼成・胎土等が近似する60も、同所出土の朝顔形埴輪の可能性はある。66は、大亀古墳群出土資料として報告されている円筒埴輪（香川県 1987）であるが、他の大亀古墳群出土資料と形態や焼成等に相違を認める。口縁部に山形の線刻が施され、底部凸帯に断続ナデ技法Aを用いる。上記以外の資料については、小片でもあり、出土古墳等を特定することはできない。

67～73は、坂田廃寺出土資料として登録されている資料である。坂田廃寺は高松市西春日町に所在する古代寺院跡で、周辺にこれら埴輪が出土する古墳や窯跡の所在は知られていない。焼成、胎土、調整等は、同市今岡古墳出土資料に近似し、おそらくは今岡古墳出土資料が何らかの理由により、混在したものと考えられる。67～71は円筒・朝顔形埴輪、72は蓋形、73は家形の各形象埴輪である。

74～88は、個人採集資料で当センターへの寄贈資料である。74～77・79は出土地不明の円筒・朝顔形埴輪片で、焼成・胎土・調整等の点から、今岡古墳出土資料である可能性が高いと考えられる。80は、出土地不明の壺形埴輪もしくは朝顔形埴輪の口頸部の小片である。内外面ハケ調整が施され、内面頸基部付近に指オサエ調整がなされ、その点からすれば広口形態の壺形埴輪の可能性が高い。焼成や胎土より、今岡古墳出土資料の可能性はあるが、断定はできない。

78 は、5cm×4cm、厚さ0.8cm程度の土器小片で、埴輪とは断定できない資料である。裏面に「山崎円筒棺カ」と墨書があり、高松市西山崎町本堯寺北1号墳等で確認されている埴質土製棺に伴う部材片として、付近で採集された可能性も考えられ、掲載した。図下端は、直線状の端面を有し、やや外傾して立ち上がる。外面は指オサエやナデ、内面は磨滅が顕著で調整等は不明、あるいは別個体から剥離した可能性もある。胎土・焼成は、高松市中間西井坪遺跡で出土した埴質土製棺等と近似するが、その点のみから器種を断定できるわけではない。形象埴輪小片の可能性も考えられるが、器種を断定できないため、不明埴輪片として報告する。81 も出土地不明の資料で、円筒埴輪の口縁部付近の小片として図示した。82 は、さぬき市岩崎山4号墳出土とされる円筒埴輪の胴部小片である。矩形の突帯の下方にはタテハケが、上方には連続的なヨコハケが施され、ベンガラとみられる赤色顔料で外面全面が塗彩される。内面はマメツが顕著で、かろうじてヨコハケの可能性のある条痕が確認されるのみで、調整等は不明。胎土や調整等より、岩崎山4号墳出土資料としてよいだろう。83 は、出土地不明の朝顔形埴輪の体～円筒部上端の小片である。外面はタテハケの後、ストロークの長いCa種ヨコハケを施す。突帯形状や内外面の調整等より、多度津町盛土山古墳出土資料の可能性が考えられる。84 は、出土地不明の円筒埴輪の胴部小片である。外面タテハケ、内面ナデ調整で、突帯は断続ナデ技法A類が確認され、その他胎土や焼成等より、観音寺市ひさご塚古墳出土資料である可能性が考えられる。

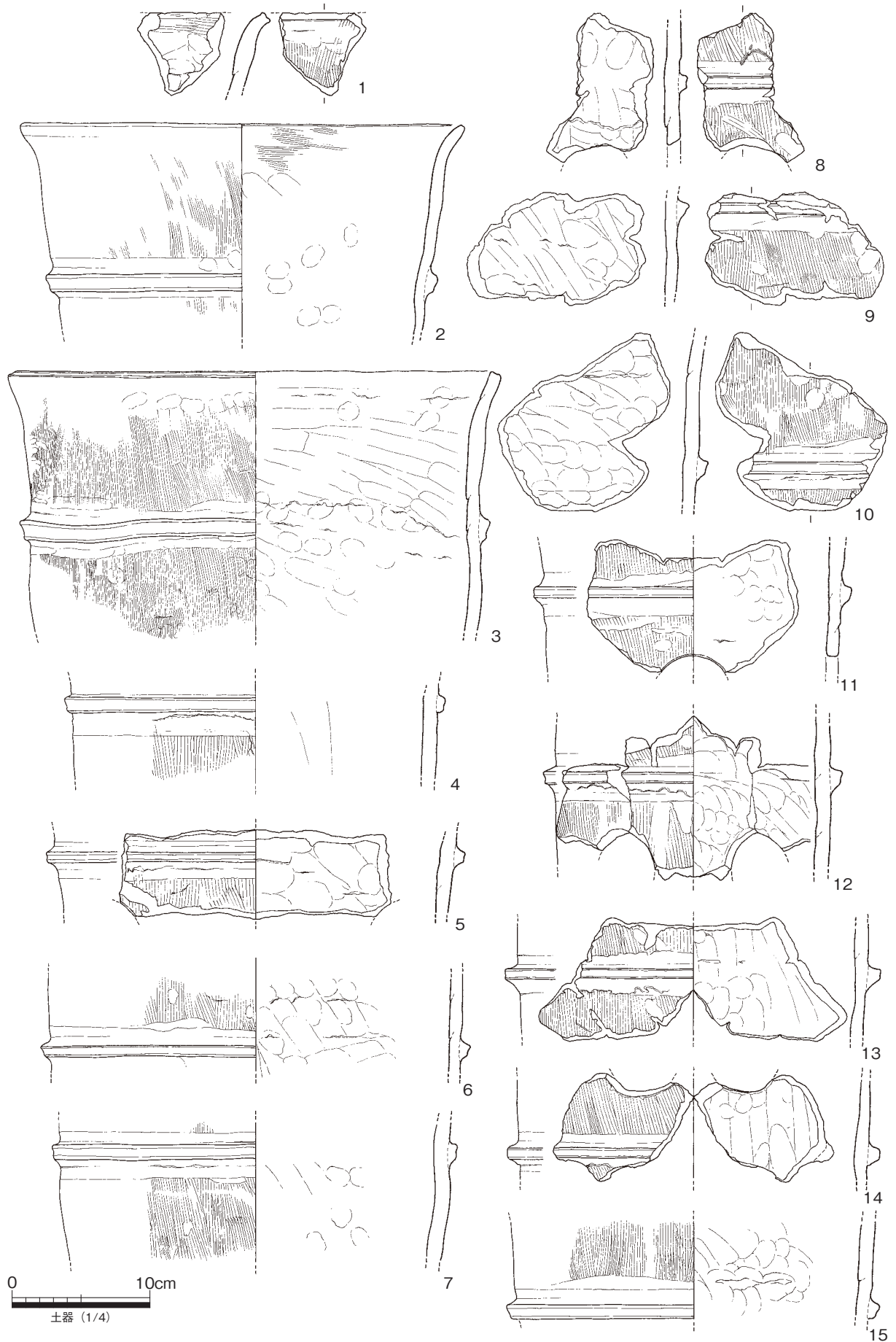
85 は、円筒埴輪底部片で、外面に「坂出茶白山」と墨書があり、坂出市田尾茶白山古墳出土資料と考える。同古墳出土資料は他に、坂出市教育委員会保管資料、(公財)鎌田共済会郷土博物館所蔵資料等がある。底部は完存し、外面タテハケ、内面ナデ調整が施される。底部高21.3cm前後を測る。突帯の割付手法は不明だが、一部の突帯剥離痕より凹線技法ではない可能性が高い。当古墳出土資料については、前稿で指摘したように、讃岐Ⅱ期2段階の資料と考える。86 は、出土地不明の円筒埴輪胴部片である。無黒斑の土師質焼成で、堅緻に焼け締まっている。外面は、やや崩れたM字形の突帯を挟んで、上位段にBd種ヨコハケを、下位段にCa種とみられるヨコハケを認める。内面は、ナデ調整の後、上端部にナナメハケ調整が施され、上位段は口縁部となる可能性がある。胎土や調整等より、大亀古墳群出土資料に近似するが、断定はできない。讃岐Ⅳ期3段階もしくはⅤ期1段階に位置付けられよう。87 は、出土地不明の円筒埴輪の底部片

で、焼け歪みにより大きく変形し、平板状を呈する。また、下端部は自重により潰れ、内面側へ粘土がはみ出す。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整を主として施す。88 は、出土地不明の家形埴輪片である。壁体部下半から基部コーナー部の破片で、I字形の裾廻突帯が付す。壁体コーナー部の破断面に明瞭な粘土接合痕が、基部から壁体にかけて2～3段の粘土紐の接合痕がそれぞれ認められることから、青柳氏の家形埴輪製作技法の軸部成形法①(青柳1995)により、製作されたと考えられる。なお、コーナー部外面には幅約4.5cm、厚さ約1.0cmの粘土板を貼付し、柱を表現している。窓等のスカシ表現は認められない。胎土や成形手法等より、今岡古墳出土資料である可能性が高い。

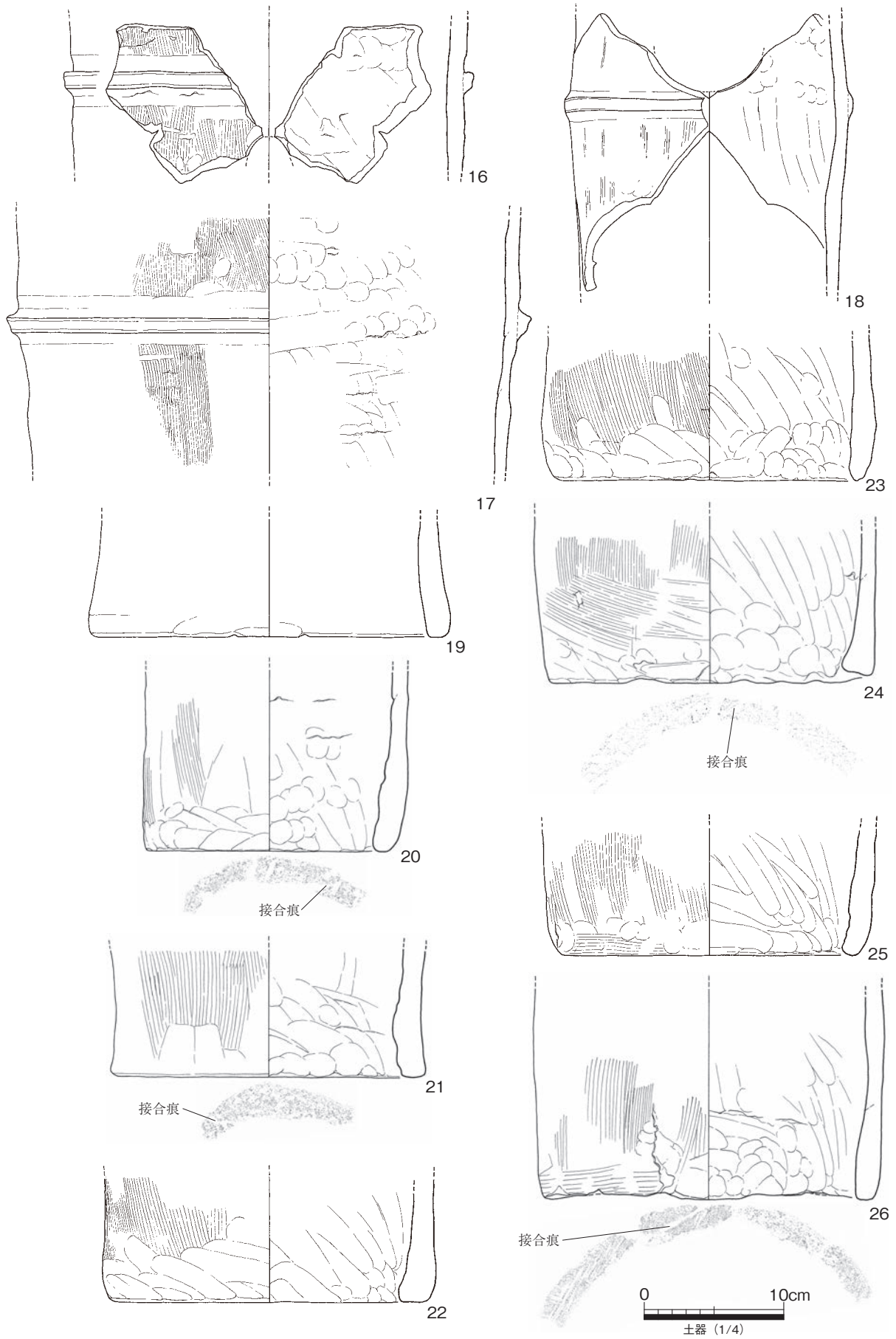
89 は、羽床神社裏出土とされる円筒埴輪の胴部小片である。無黒斑の軟質土師質焼成で、胴部径24cm前後に復元されるS型である。突帯3b類、外面はCa種ヨコハケ、内面はヨコハケを施し、円形透孔を穿つ。90・91 は、白石神社出土とされる円筒埴輪片である。90 は、無黒斑の硬質土師質焼成で、浅黄橙色を呈する。突帯2b類で、円形透孔を穿つ。外面Ca種とみられるヨコハケを施す。91 は、円筒埴輪胴部片として図示したが、形象埴輪の基部片となる可能性もある。無黒斑の軟質土師質焼成で、やや突出度の高い細身の突帯を付す。

92 は、さぬき市神崎八幡山古墳出土の盾形埴輪の盾面右下コーナー部付近の破片である。接合できない同一個体とみられる破片が他にも若干量あり、さぬき市教育委員会にも同一個体とみられる破片が所蔵されている。当センター所蔵資料の一部のみ図化した。残存破片等より、盾面は長さ約115cm、幅45cm以上に復元される。なお、円筒部の資料は保管されていない。盾面は、長方形革盾系に属し、内区の枠組みは残存資料より日字状を呈し、内区と外区の境の区画が口字状となるa1型式(小栗2004)に属する。板ナデ・ナデ調整で器面を整えた後、盾面四周を綾杉文と方格文を巡らし、外区右側に内向の鋸歯文を、下側に外向の鋸歯文をそれぞれ配する。鋸歯文は頂点より放射状に線を引いたBIa類(小栗2004)である。内区は綾杉文で区画されるが、内区文様は破片がなく不明である。93 は、同古墳出土とされる動物埴輪の脚部小片である。径7cm程度の直立する中空円筒状を呈し、下端部は指頭による押捺により括れ、蹄を表現する。形状より左脚の可能性が高い。

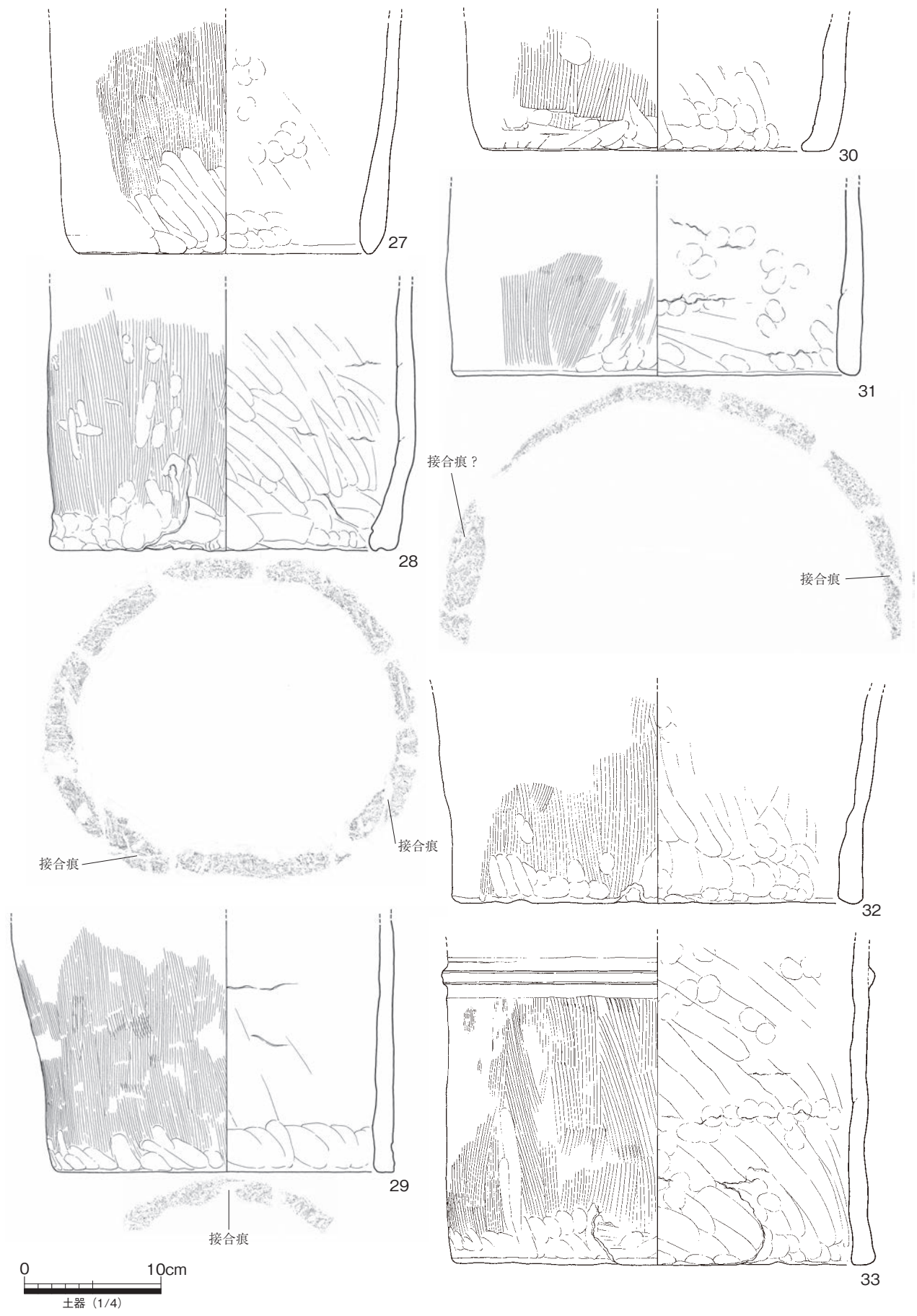
94 は、綾川町滝宮万塚古墳群出土とされる円筒埴輪の底部片である。無黒斑の軟質土師質焼成で、底部高10.9cmを測る。突帯は2b類、底部外面は丁寧な板ナデ調整が施され、2段目はヨコハケが施された可能



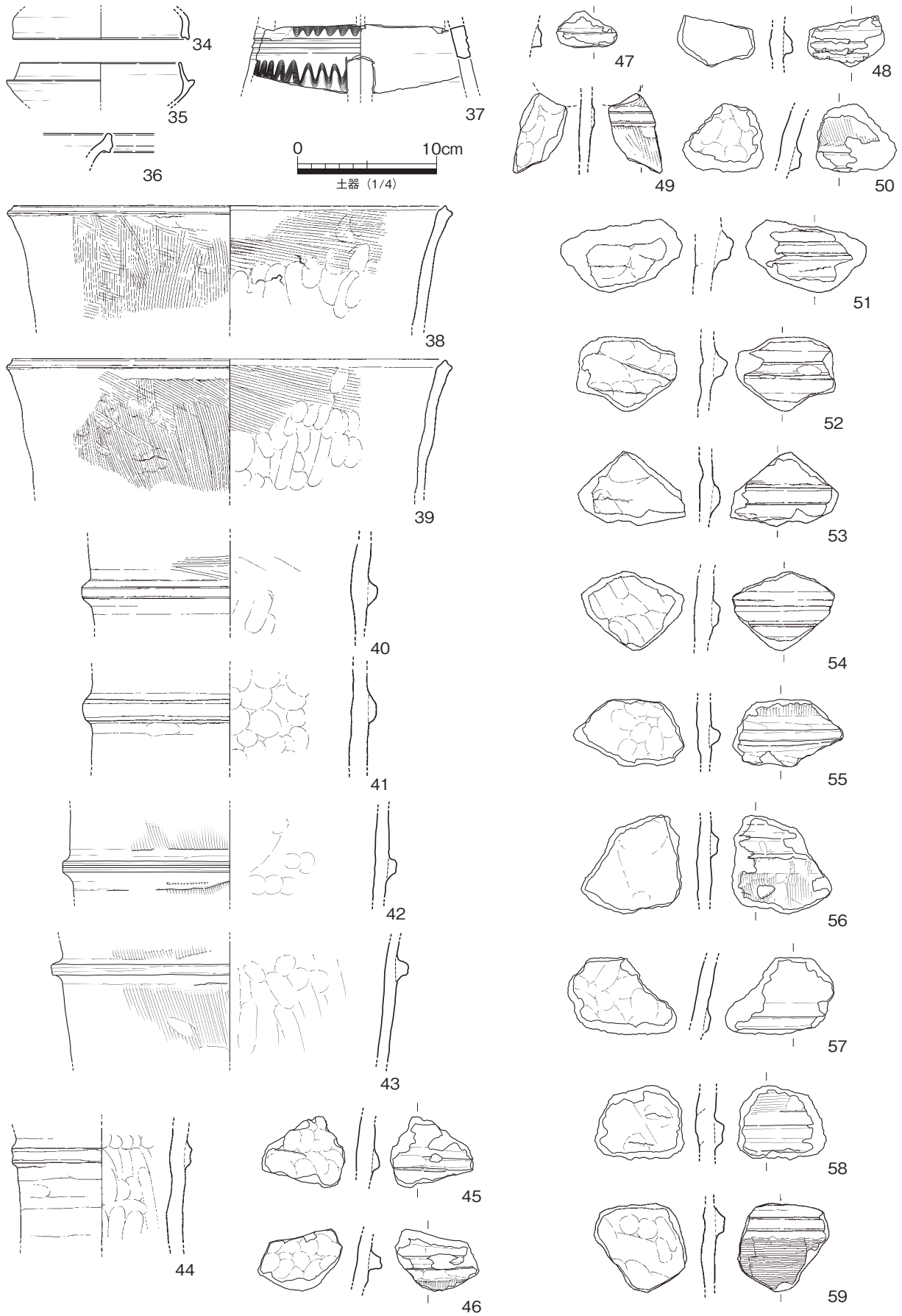
第 34 図 大亀古墳群出土円筒埴輪実測図 1



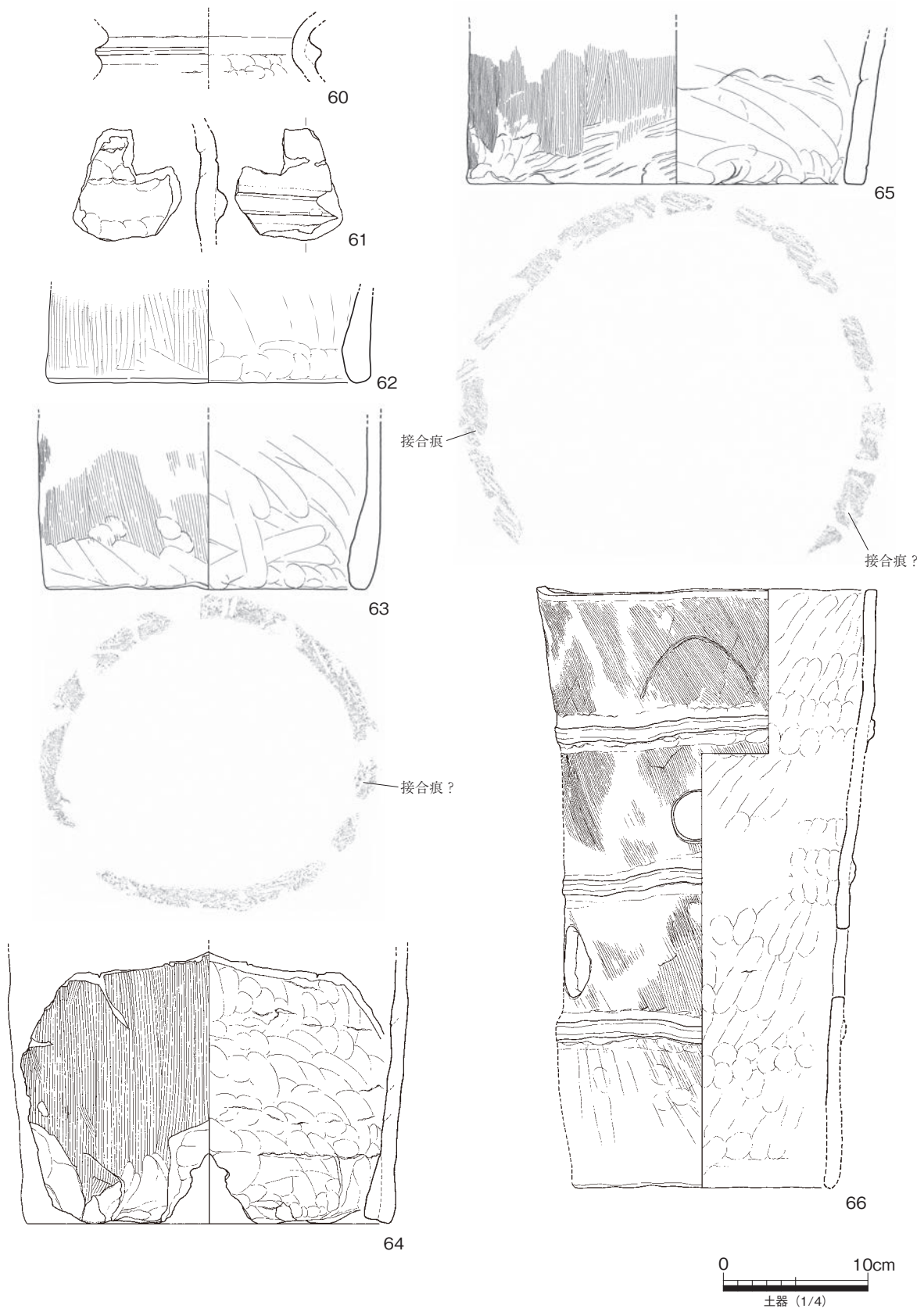
第35図 大亀古墳群出土円筒埴輪実測図2



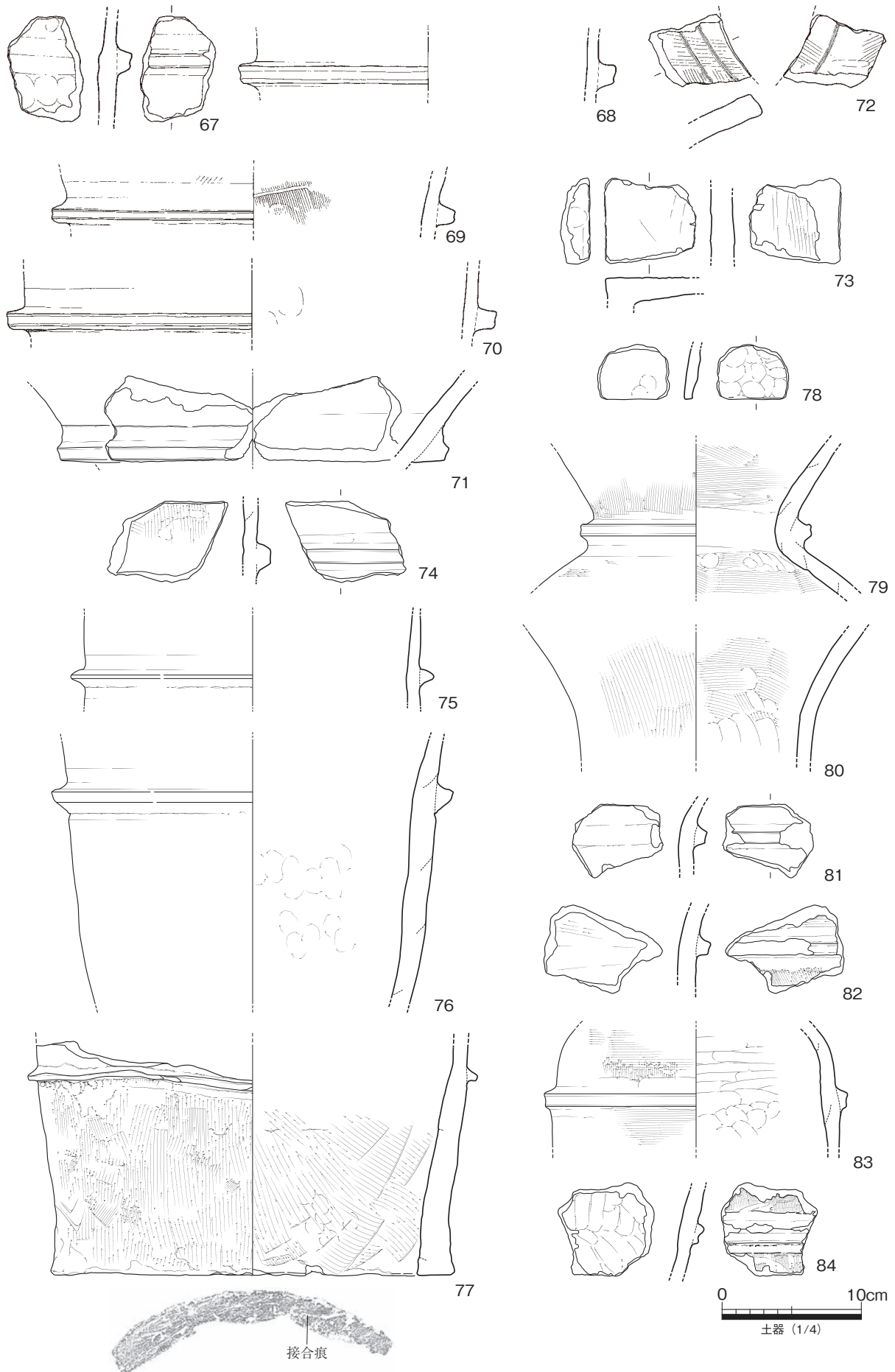
第 36 図 大亀古墳群出土円筒埴輪実測図 3



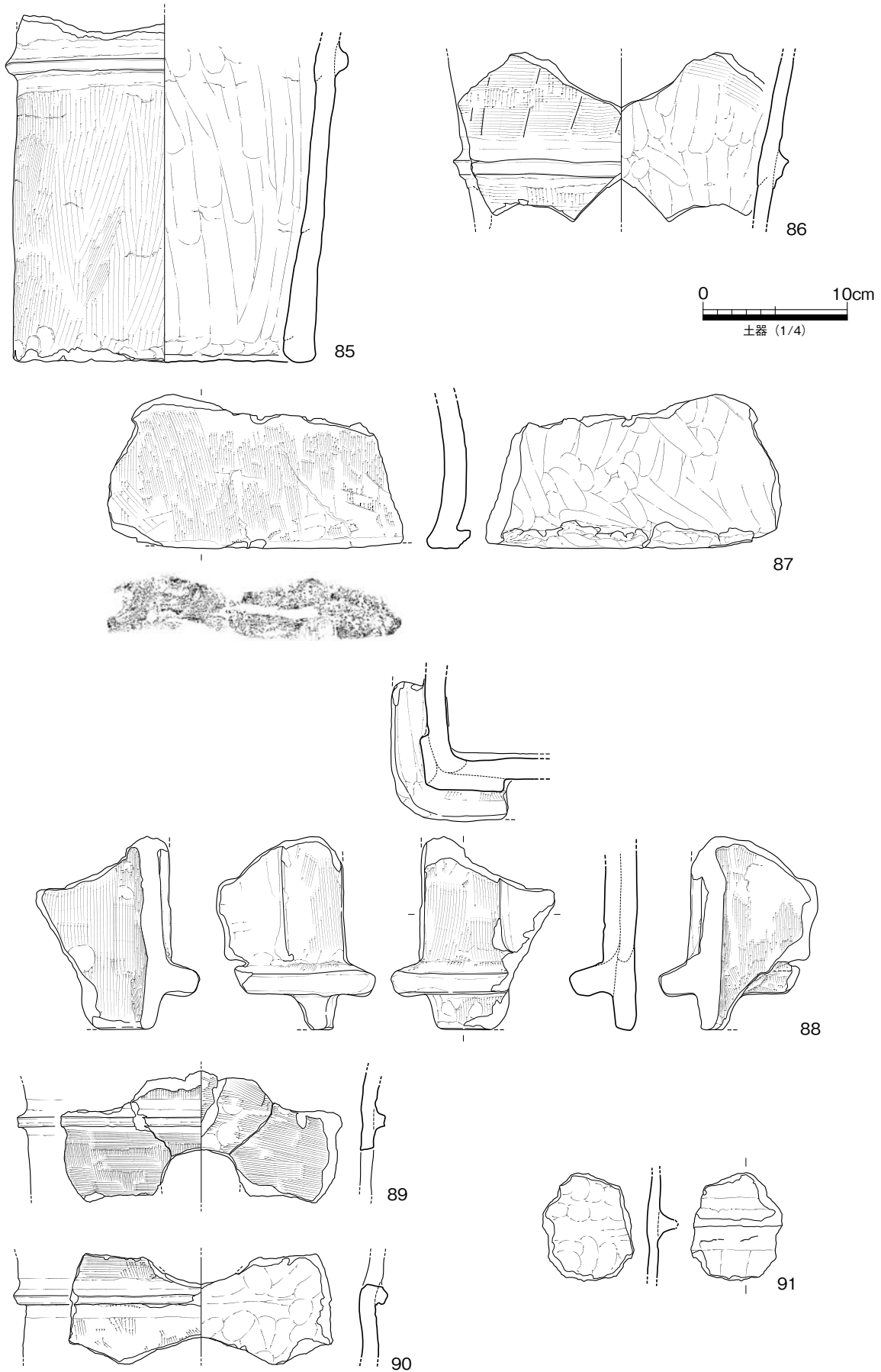
第37図 出土地不明埴輪実測図1



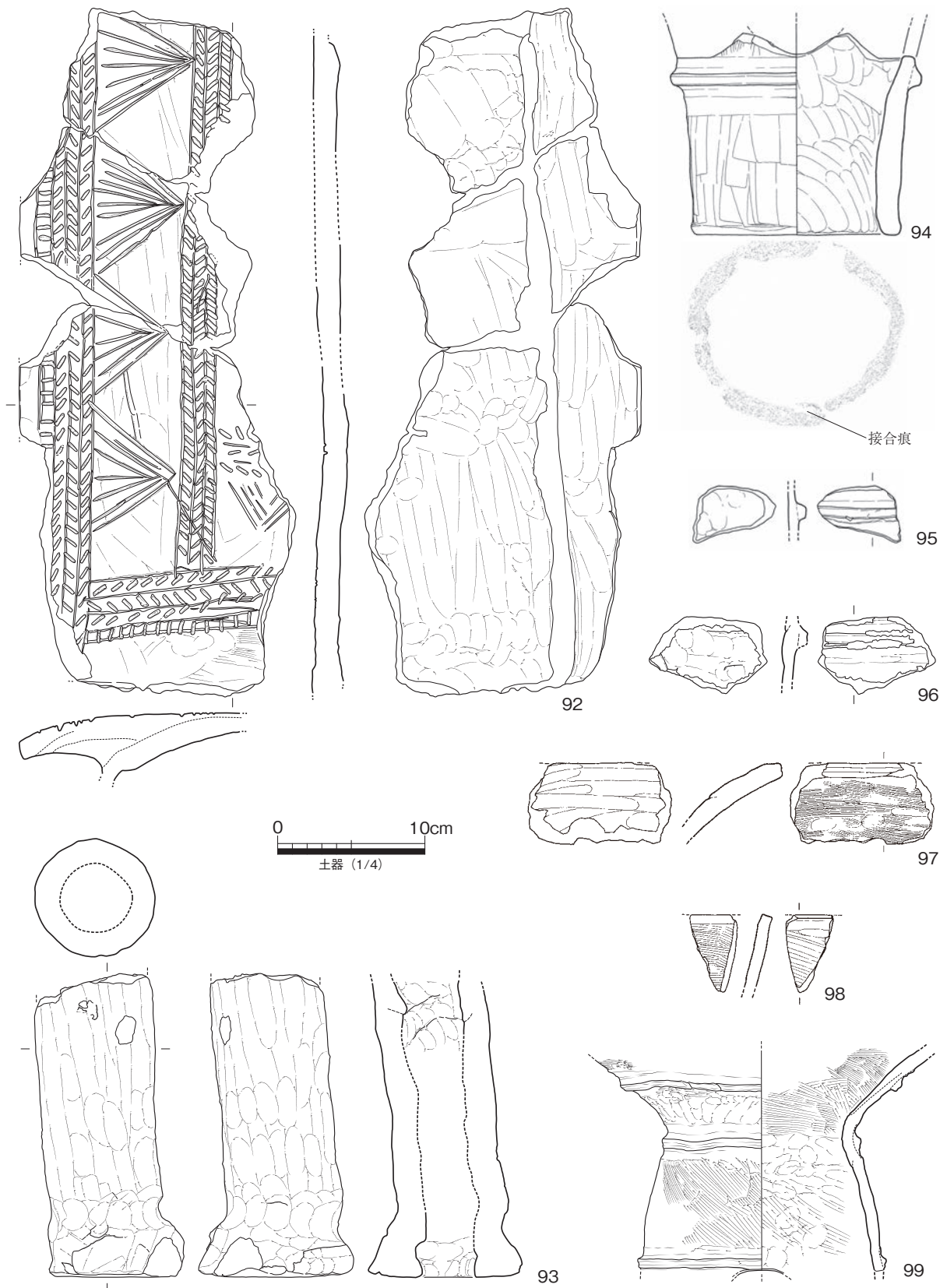
第 38 図 出土地不明埴輪実測図 2



第39図 坂田廃寺他出土円筒埴輪実測図



第 40 図 田尾茶臼山古墳他出土埴輪実測図



第41図 神崎八幡山古墳他出土埴輪実測図



第 42 図 本村古墳出土土輪実測図

性があるが、マメツのため不明。内面はナデ調整される。2 段目に円形透孔を穿つ。95 は、西福寺古墳出土とされる円筒埴輪の胴部片である。無黒斑の硬質土師質焼成で、全体にマメツが顕著である。突帯は 2b 類。96 は、三木町権八原（墓地）出土とされる円筒埴輪の胴部小片である。かつて発掘調査された権八原古墳群中で円筒埴輪が出土した古墳はなく、調査古墳以外の古墳に伴う可能性がある。無黒斑の軟質土師質焼成とみられ、3b 類の突帯を付す。97 は、寺尾大塚古墳出土とされる朝顔形埴輪口縁部の小片である。外面ヨコハケ、内面はナデ調整され、外面には赤色塗彩された可能性がある。98・99 は、男山古墳群出土とされる埴輪片である。98 はⅢ類口縁部の円筒埴輪小片で、外面ナナメハケ、内面はヨコハケを施す。99 は、硬質土師質焼成の朝顔形埴輪片である。これら 2 点の焼成、胎土、調整等は、旧稿（蔵本 2016）で長尾八幡旅山出土とした資料に酷似し、おそらくは同墳出土資料が混在したものと考えられる。

100～117 は、本村古墳出土とされる遺物で、いずれも無黒斑の軟質土師質焼成で、粗粒の石英・長石粒を多量に含み、橙色を呈する点で共通する。同一古墳の出土資料と考えて大過ないと思われる。小片化し、また類例に乏しい形態を多く含むため、埴輪としてよいか判断に迷ったが、資料化することで他の研究者の判断を仰ぎたい。100 は円筒埴輪の口縁部小片として図化した。緩やかに外反して開くⅡ b 類の口縁部で、外面は左上がりのナナメハケ、内面はナデ調整を施す。101・102 は盾形埴輪とみられる形象埴輪の小片である。いずれも形象面はハケ調整で器面を整えた後、鋸歯文状の線刻を施す。小片のため、型式等は不明である。103～107 は板状を呈する形象埴輪の小片である。図右面はハケ調整もしくは板ナデ調整され、図左面はナデ調整が施される。盾形埴輪等の可能性が考えられるが、線刻がなく断定できない。108 は正面逆台形状を呈する板状小片である。図右面には別の個体との剥離痕が認められ、逆台形板状部がレリーフ状に貼付されていたとみられる。形状より、馬形埴輪の障泥の可能性もある。109 は正面バチ形を呈する板状品で、本資料も図右面に別個体との剥離痕を認める。長軸方向にわずかに弧を描き、形状より巫女形埴輪のいわゆる

鳥田髻に近似する。110 は径約 12cm の円筒状に復元される器種不詳の形象埴輪小片である。外面ハケ調整後鋸歯文状の線刻が施される。111 も板状を呈する形象埴輪の小片で、形象面には粘土板を貼付して浅い段を形成し、その左側に段に沿って沈線 2 条を引いた後鋸歯文を線刻する。112～114 は人物表現の上肢の可能性のある円筒状の破片で、主に上下端部を欠損する。人物と仮定すれば、3 点出土していることから、2 体以上が出土していた可能性が想定される。115 は、図右面に円筒状の剥離痕を認める小片で、形状より上肢が剥離した人物表現の肩部片の可能性を考える。116・117 は、不整円筒状の土製品片で図下端部がやや広がる。人物表現の脚部片の可能性を考える。足首と想定される位置に、細い粘土紐を数条巻き付けた装飾表現を認めるが、具体的に何を表現したものかは不明である。

参考・引用文献

青柳泰介 1995 「家形埴輪の製作技法について」『日本の美術第 348 号 家形埴輪』、至文堂
 一瀬和夫 1992 「河内平野とその周辺の埴輪編年概観」『古代文化』第 44 巻第 9 号、財団法人古代学協会
 小栗明彦 2004 「畿内の盾形埴輪文様分類試案」『堀田啓一先生古稀記念献呈論文集』、堀田啓一先生古稀記念献呈論文集作成委員会
 香川県 1987 『香川県史 第 13 巻』資料編考古
 蔵本晋司 2016 「仲戸東遺跡出土埴輪の占める位置」『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊 仲戸遺跡・仲戸東遺跡』、香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局
 蔵本晋司 2017 「四国における前中期古墳出土埴輪の基礎的研究 - 香川県今岡古墳出土埴輪を中心として -」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 27 年度』、香川県埋蔵文化財センター
 十河良和 2003 「和泉の円筒埴輪編年概観」『埴輪論叢』第 5 号、埴輪検討会

遺物番号	出土地	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土				法量 (cm)			残存率	備考
				外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径		
34	不明	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	やや軟	細・少				12.5			1/8 未満	
35	不明	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	良好	細・少				11.4			1/8 未満	
36	不明	須恵器	短頸壺	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	良好	細・少							1/8 未満	
37	不明	須恵器	器台	回転ナデ後瓣描波状文	回転ナデ	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	良好	細・少							1/8	

第 25 表 須恵器観察表

讃岐古代集落の類型化の試み 1

—建物配置を中心に—

信里 芳紀

1 はじめに

古代の地方官衙における集落研究は、常に中央宮城との対比で進められてきたといえる。水野正好が、三大寺遺跡（近江国庁）の建物配置や広場を、朝廷内大極殿院・朝堂院や遠朝廷政庁（大宰府・多賀城）と対比することでその政治的構造を読み取り、近江国府国衙政庁と評価（水野 1977）したのを皮切りに、その後東北の各城柵や伯耆、出雲国府などの調査が行われたことも、官衙遺跡を中心とした集落研究が開始されたきっかけとなった。国衙を中心とした研究は、類似する建物配置構造をもつ集落に対しても適用され、郡衙として評価されるようになる（推定三次郡衙・中山官衙遺跡）。山中敏史は、こうした一連の研究の方向性を整理し、全国の発掘資料を基に国府（国庁）・郡衙・郡衙出先機関までの類型化を推し進め、官衙遺跡を中心とした古代集落研究を前進させる（山中 1994）。具体的な性格・機能の推定が可能な官衙遺跡を中心に古代の地方集落論を進める研究といえる。

一方で、広瀬和雄は、古墳研究に比べて低調であった古墳時代の集落研究を全国的な資料を用いた類型化によって行い、その後、古代・中世前半まで研究を広げた（広瀬 1978.1983.1986）。広瀬の研究は、発掘調査で明らかになった集落景観や単位から世帯共同体やその首長を想定し、耕地開発を絡めながら集落（村落）の存立基盤や国家との関係、経営主体の首長層から領主層へ変異過程を論じる。広瀬の「村落首長」の言葉に象徴されるように、当時、一定程度の研究が進展していた官衙遺跡以外の一般的集落を対象として取り上げるものである。

他にも数多い先行研究がみられるが、大きく捉えると、古代集落研究にはこれら二つの流れがあるといえる。前者の官衙遺跡を中心とした研究では、中央宮城に基づく類型化によって、国府・郡衙等の遺跡（集落）の具体的な機能や位置付けに漕ぎ着ける半面、それ以外の資料については「官衙的集落」「一般集落」として括られ、個別の地域内での論議に繋がり難い。後者の研究は、主に一般集落を対象とし、それぞれの地域での発掘資料を基に組み上げることで特性を維持するが、「官衙風集落」「官人首長」の語に象徴されるように、遺跡（集落）の評価には官衙遺跡の研究が前提に成り立っているのは明らかである。これらの先行研究が示すことは、どちらか一方の研究のみで成り立たな

いということであろう。

讃岐における研究では、山中敏史の官衙遺跡の類型化を参考にした佐藤竜馬の仕事がある（佐藤 1998）。佐藤の研究では、増加しつつあった集落資料に対して検討を加えた結果、国府（政庁）・郡衙に相当する官衙遺跡は未確認であるが、大型建物配置や遺物から多数の官衙関連遺跡を抽出するとともに、富豪層居宅や一般的集落の多様な形態と、長期間継続しない集落が多数を占める動態的特性を指摘した。その後、佐藤は一見継続的にみえる集落であっても、建物構成の出土遺物の変化から経営主体層の変質が読み取れる（佐藤 2000a）ことや、古代集落から中世集落への移行過程において 11 世紀中葉に断絶・画期が認められることを簡潔に指摘する（佐藤 2000b）。

佐藤の仕事の後、古代集落の調査事例は更に増加し、実態不明であった讃岐国府の具体相も見えつつある段階に来ており、学史が示す二つの大きな流れを踏まえた論議、すなわち官衙・居宅・一般的集落を総括的な集落論として展開させる必要があるだろう。

そこで、本論では、集落論の最も基礎となる各遺跡の遺構論の基礎的な把握を行うことを目的として、建物の配置と集合形態、特に建物群と広場（空閑地）の関係を主要な分類基準とした類型化を行いたい。広場に注目する理由は、建物配置の把握には、常に広場なり周囲の空閑地を意識しつつ観察を行うという過程を踏む必要があることや、官衙研究において聴政・朝賀の場として重視されたからである。

次に、系譜分類の視点を加えて、各類型の集落毎の時間的な動態を検討し、それぞれの関係性を整理する。また、これを補強する材料として柱間など建物の格式や、調査面積（微高地）に対する建物遺構（柱穴）が占める密度を確認し、各類型との対応関係を検討することで特性を抽出することを目指す。建物の柱間を取り上げる理由は、部分的な確認調査では建物全体規模の把握が難しいことが多いことによる。遺構密度については、集落造営可能な微高地に対する占有度、つまりどのような集落を造営するのかといったデザインや意図を表現する可能性を考えたからである。継続する集落であっても類型や遺構密度が異なる場合には、機能や性格が変質していることも十分に考慮する必要があるだろう。

文中の大型建物の表記は、西村尋文の仕事（西村

1990) に習い、床面積が40㎡以上の場合に使用する。

2 各類型の設定

1 類 (第43図)

大型建物を中心にして、対称的な建物配置や柱筋や棟通りの厳密な一致が見られるもので、官衙遺跡と評価される類型に相当する。主要な建物群は溝や柵列で囲繞される。これら基準を満たす集落は稲木北遺跡(8c前葉～中葉)のみであり、全貌は不明ながら讃岐国府跡開法寺東方地区(7c後葉～8c初頭先行官衙、8c後葉?～11c前葉)が相当する可能性がある。更に細別が可能とみられるが、資料数が少ないことからここでは一括しておく。

2 類 (第44.45図)

数棟の大・中型建物が広場を中心に「口」の字、「コ」の字を意識した状態で集合する類型であり、官衙的とされるものに近い。一部に柱筋や棟通りが一致する箇所がみられるが1類程に厳密ではなく、対称的な配置もやや簡略化された一群。一部に柵列・溝等の区画施設を認めるが、完周した事例は確認できない。大型建物の有無や、建物配置状況(広場の明示度)から、2A類と2B類に細別する。2A類の事例として、下川津遺跡①、②(7世紀中葉～後葉)、川津一ノ又遺跡②(8c後葉～9c前葉)③(9世紀中葉～末葉)があり、2A類の中には、下川津遺跡③(7c末葉～8c前葉)、川津一ノ又遺跡①(7c末葉～8c初頭)のように桁行方向の直列配置を強く意識した一群や、下川津遺跡④(8世紀中葉)のように大型総柱建物を含む事例がみられるが、広場が確保される点を重視し、ここでは一括する。2B類は正箱遺跡①(8c後葉～9c前葉)、稲木遺跡B地区①(8c前葉)、郡家原遺跡①(8c前葉～後葉)が挙げられる。

3 類 (第46.47図)

広場を中心に直列・並列配置された建物が緩やかに集合する形態で、基本的に大型建物は含まれない。建物は、個別の配置に2類や5類の影響が想定できるが、2類程広場は明確にはならず、建物は周縁へ向かって漸移的に配置される。調査範囲が限定される場合には把握が困難となる恐れがあるが、事例として下川津遺跡④(9c後葉～10世紀前葉)、下川津遺跡⑦(7c末～8c前葉)川津一ノ又遺跡④(10世紀)、正箱遺跡②(10c中葉～11c前葉)があり、建物群の中で総柱建物が目立つ下川津遺跡⑤(7世紀末葉～8c初頭)、下川津遺跡⑥(8c中葉)も含まれる。建物数がまばらとなるが、総柱建物が目立つ川津一ノ又遺跡⑤も東

側に未調査地を控えるため、本類型に含めておく。また、調査範囲に限られるため確定はできないが、兀塚遺跡①(7c後葉～8c初頭)、②(8c前葉～中葉)、津森位遺跡①(9c末葉～10c前葉)は本類型に含まれると考える。

4 類 (第48図)

広場を意識せず、20～30㎡の中型建物が集合する形態。建物配置は部分的な直列・並列・直交配置など様々なものを含み、主屋は明確ではない。事例として、稲木遺跡B地区②(7c中葉～後葉)、金蔵寺下所遺跡①(7c末葉～8c初頭)、金蔵寺下所遺跡②(8c前葉～中葉)、川津一ノ又遺跡⑥(7c中葉)、川津一ノ又遺跡⑦(7c後葉)、川北遺跡①(8c前葉～中葉)がある。主屋がやや明確な稲木遺跡B地区③(8c前葉)、建物の間隔が空く前田東・中村遺跡①(8世紀中葉～前葉)は、本類型内の他の事例に比べ違和感があるが、広場を意識しない点を重視しここに含める。

5 類 (第49.50図)

広場を意識せず、建物が桁行方向で直列配置される類型で、建物列は複数列に及ぶ場合もある。大型建物も含むものを5A類、大型建物が含まれないものを5B類に細別する。この内、5B類は、調査範囲が限られた場合に単独で存在するかどうかの判断が難しい。建物の桁行直列配置の要素のみを切り取れば、2A類の川津一ノ又遺跡①や稲木遺跡①の直列配置の一部やそれに付随する形でみることもできるし、3類の建物群の中にも直列配置を採るものも確認できる。従って、5B類は部分類型に止まり、他の類型とセットとなることで集落景観を構成すると考えられよう。

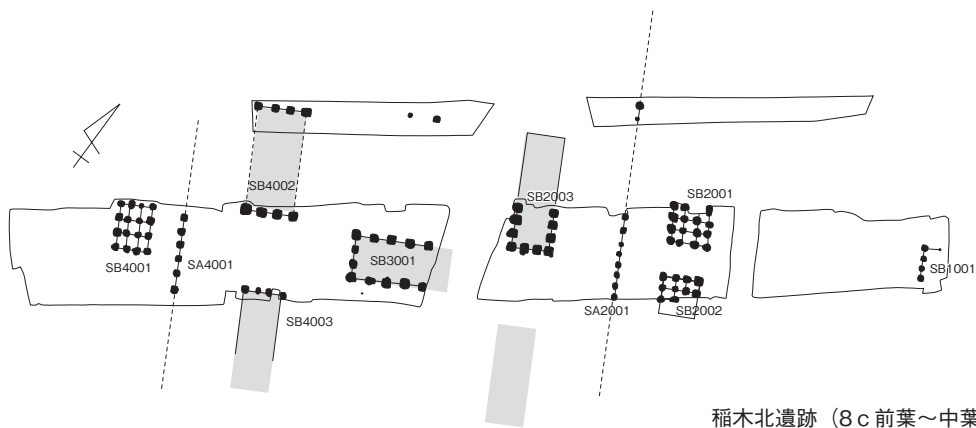
5A類の事例として前田東・中村遺跡②(8世紀中葉～9世紀前葉)を、5B類として川北遺跡②(7c末葉～8c初頭)、正箱遺跡③(9c後葉～10c前葉)、津森位遺跡②(8c後葉)が挙げられる。

また、5A類に類似する事例として、道路遺構に隣接した位置に大型建物と中・小型建物を並置する坪井遺跡(8c後葉～9c前葉)、多肥平塚遺跡(9c中葉～10c前葉)がみられるが、ここでは本類型とは切り離れた事例に止めておく。

6 類 (第51図)

広場を持たず、大型建物が並列・並置される類型。大型建物には、廂や床束をもつものが多くみられる。2～3棟の大型建物を中心に数棟の副屋とみられる小型建物がコンパクトに配置される。典型事例として汲仏遺跡①(10世紀前葉～中葉)、前田東・中村遺跡③(9c

1 類



稲木北遺跡 (8c前葉~中葉)



讃岐国府跡 (開法寺東方地区) 平安時代前半 (9c後葉~10c初頭)

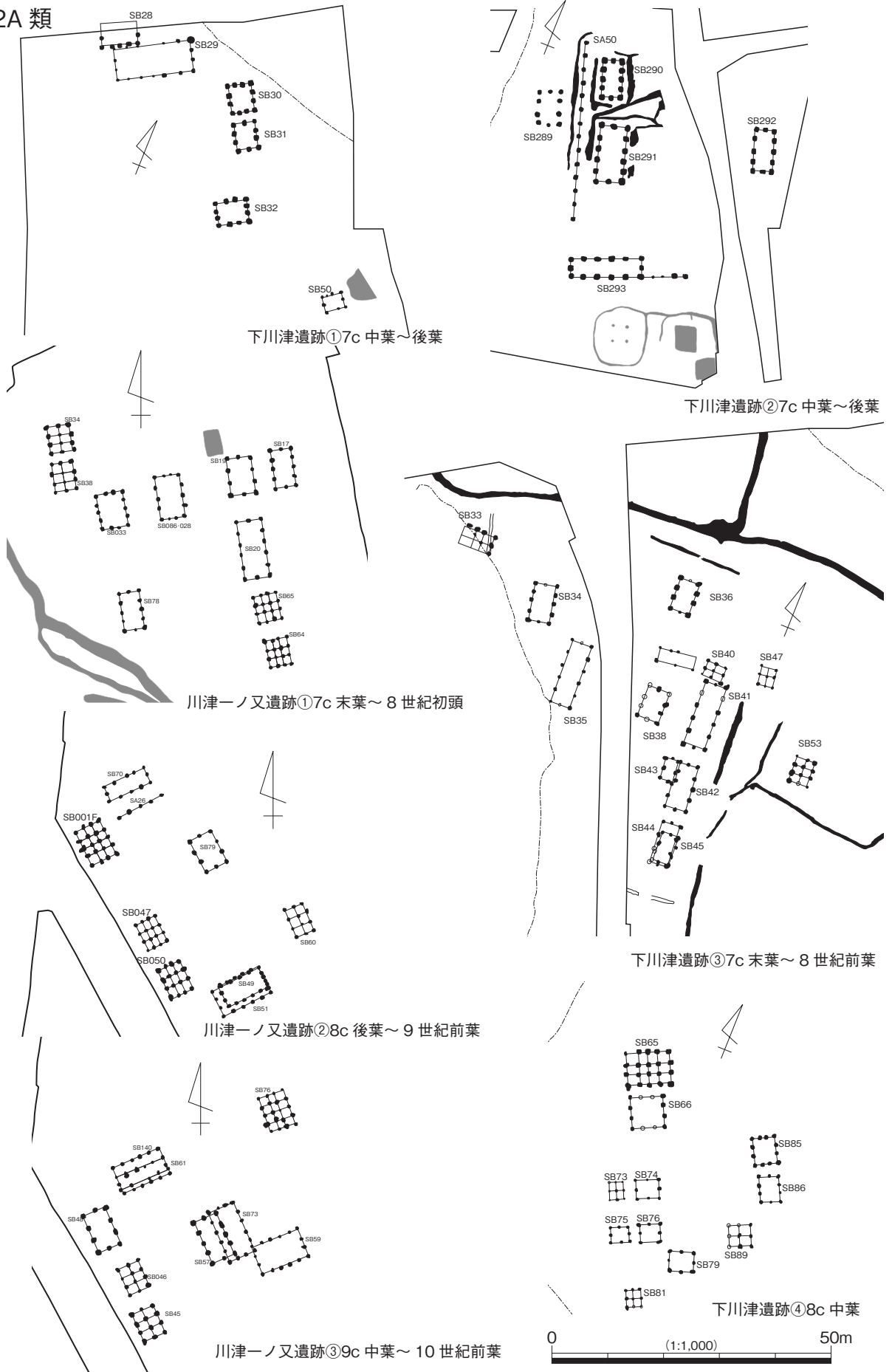


讃岐国府跡 (開法寺東方地区) 平安時代後半~平安時代初頭 (10c前葉~11c前葉)



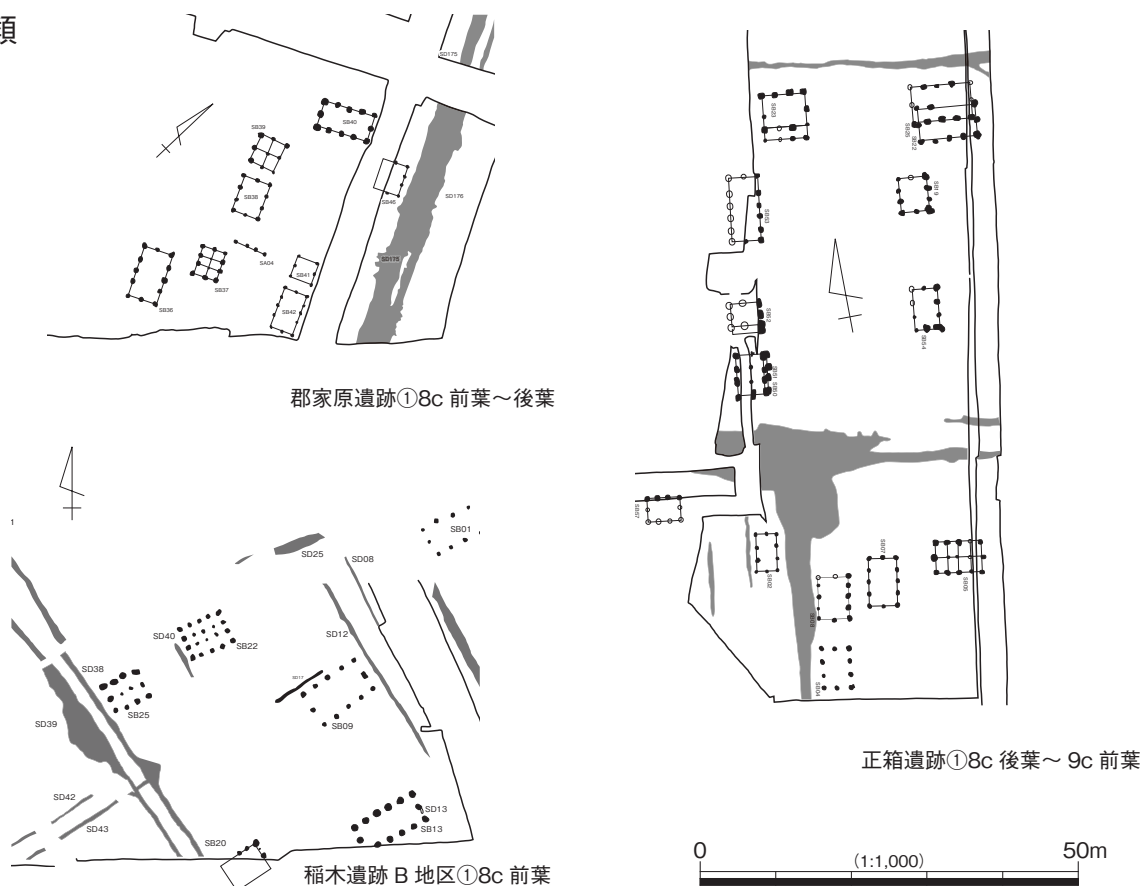
第43図 1類の諸例

2A 類



第 44 図 2A 類の諸例

2B類



第45図 2B類の諸例

後葉～10c 前葉)、同④(10c 中葉～11c 前葉)があり、前田東・中村遺跡④は溝を挟んで大型建物が並置され、汲仏遺跡①では間隔をあけて廂付きの大型建物の存在が窺えるなど、集落内で本類型が複数存在することも予想される。方位がやや振れた廂付大型建物が3棟並置される買田岡下遺跡①(9世紀中葉～9世紀後葉)や廂付を含む大型建物が「L」字に配される西村遺跡①(10c 中葉～後葉)は、前田東・中村遺跡や汲仏遺跡に比べ大型建物の配置形態が異なるが、両遺跡とも集落が丘陵裾部に立地していることから地形的な制約を受けていると考えられる。

7類(第52図)

主屋とみられる大型建物1、2棟に対して副屋の小型建物1棟で構成される類型。現時点では、東山田遺跡①(10c 中葉～11世紀前葉)、下川津遺跡⑦(11世紀前葉)、西村遺跡②(10c 末葉～11c)の3例のみとなり、不安定な設定となるが、主屋と副屋の関係が明確に表れたものとして設定しておく。西村遺跡②は、調査範囲が限定的なものであり、周辺の未調査地に副屋の小型建物が存在する可能性は否定できないが、主屋と副屋が接近して設けられる点を重視し、本類型に含める。

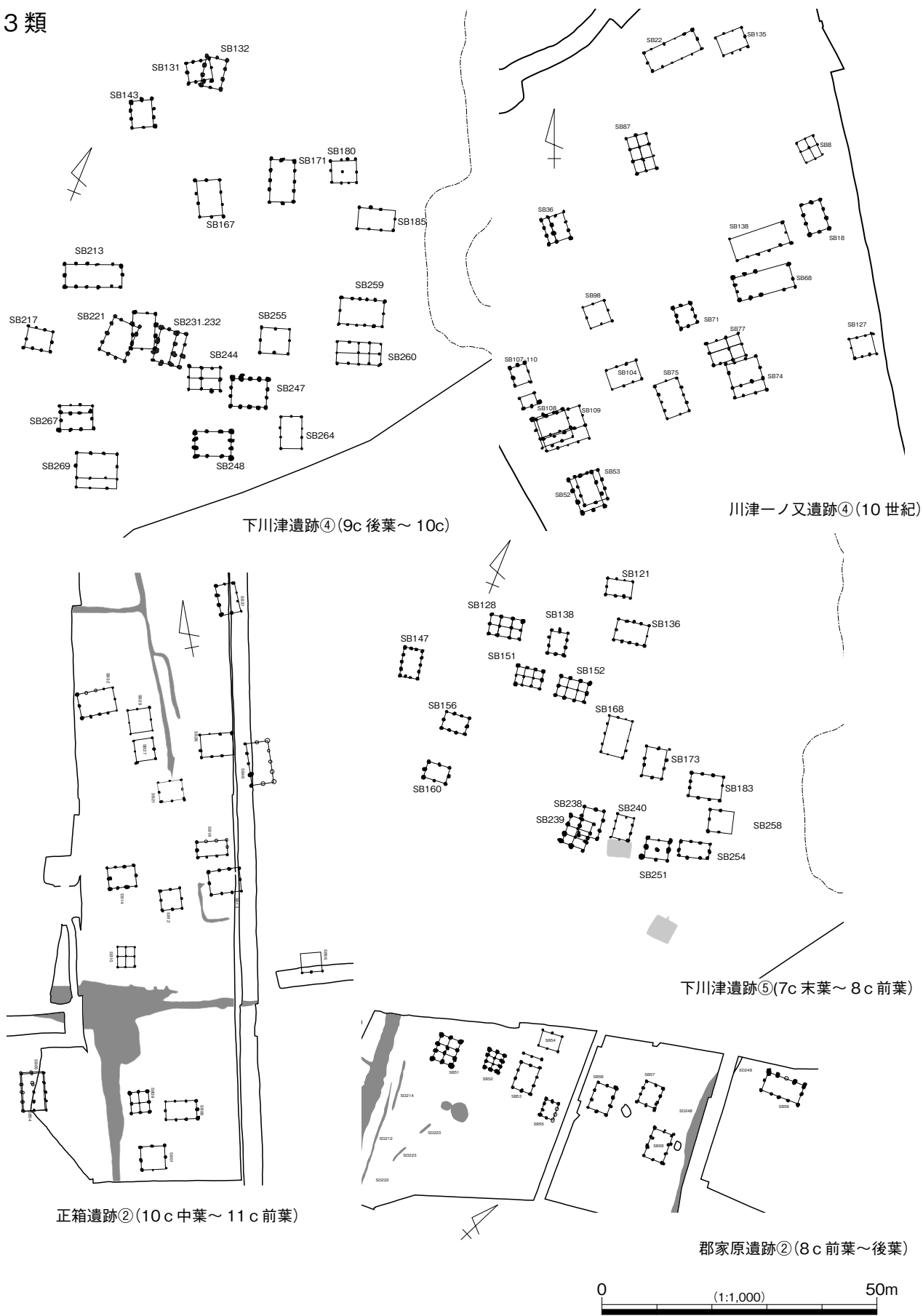
また、同一地点で6類の廂付大型建物群に継続するものであり、本類型の系譜関係を推定する重要な資料といえる。

8類(第53.54図)

中・小型建物2～4棟が1単位となり、一定規模の空間に散在する類型であり、集落によっては単独で存在し最小構成単位になる場合があるが、2～6類に付随して確認されることも多い。従って、1単位で単独で集落を構成するのではなく、数単位が一定間隔をあけて併存する場合や、2～6類を補完する小単位として存在する類型と捉えるべきと考える。

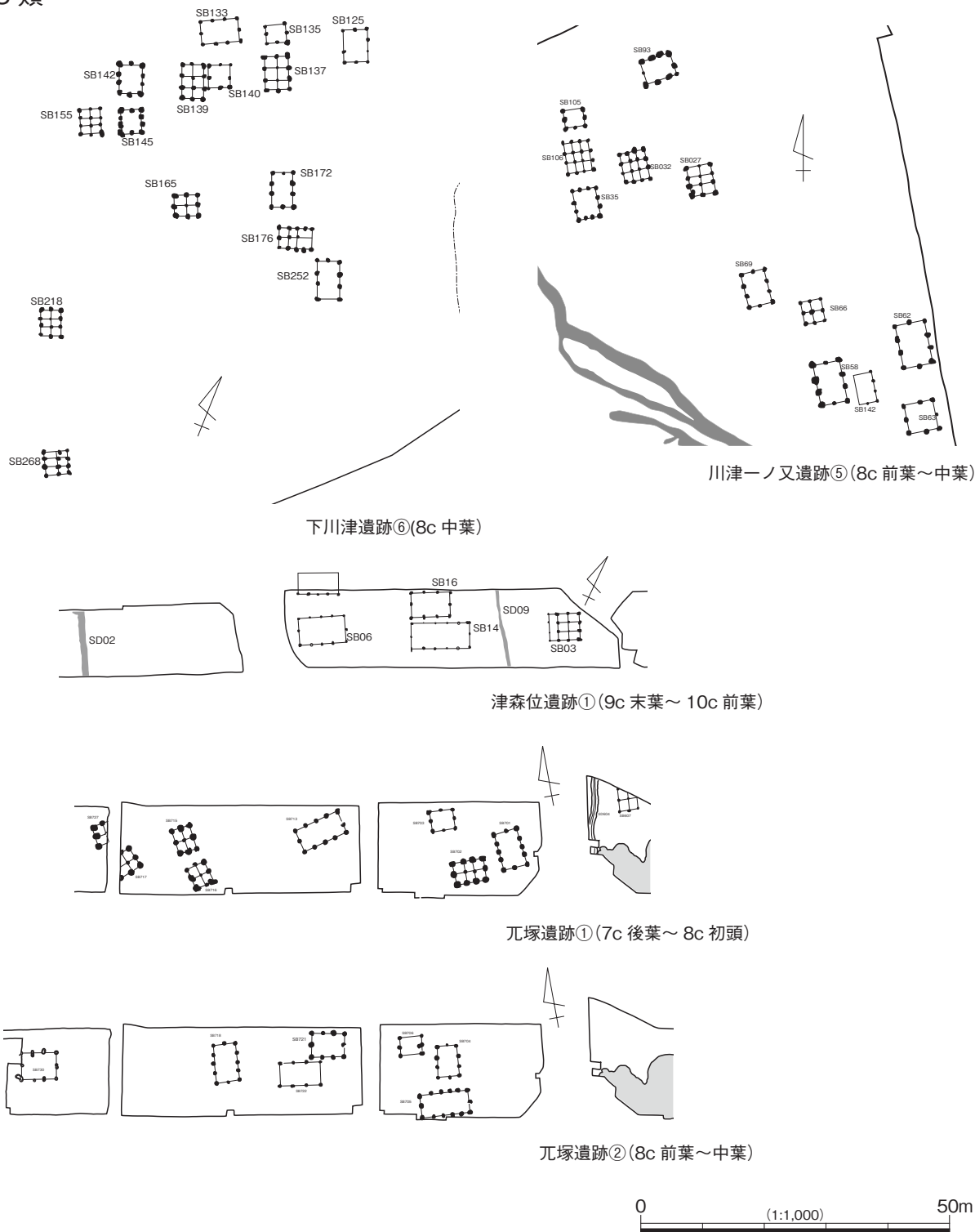
南天枝遺跡②(7c 末葉～8c 初頭)や、小山南谷・新田本村遺跡①(8c 初頭～中葉)など30㎡クラスの中型建物が伴う事例が含まれるが、周辺の建物分布は希薄である。尾端遺跡①(7c 中葉)、小山南谷・新田本村遺跡②(8c 後葉～9c 前葉)では2棟の小型総柱建物が直列配置されたり、郡家一里屋遺跡①(7c 中葉)では中型の総柱建物が散在するが、周囲の建物は疎らであり、柱構造は異なるけれども、基本的な在り方は共通する。

3類



第 46 図 3類の諸例 (その1)

3類

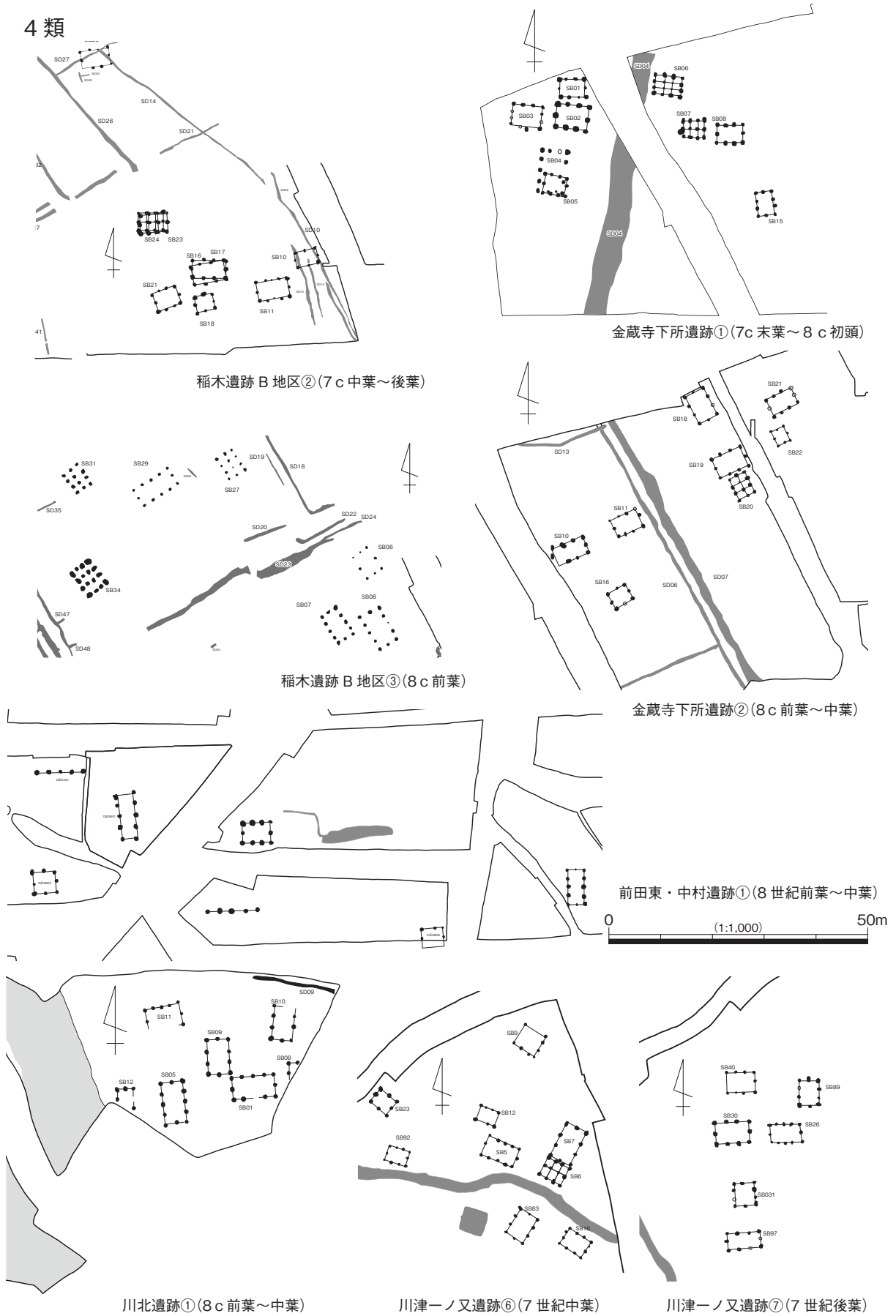


第47図 3類の諸例 (その2)

3 各類型の消長と占有度 (棟数・密度) の対応関係

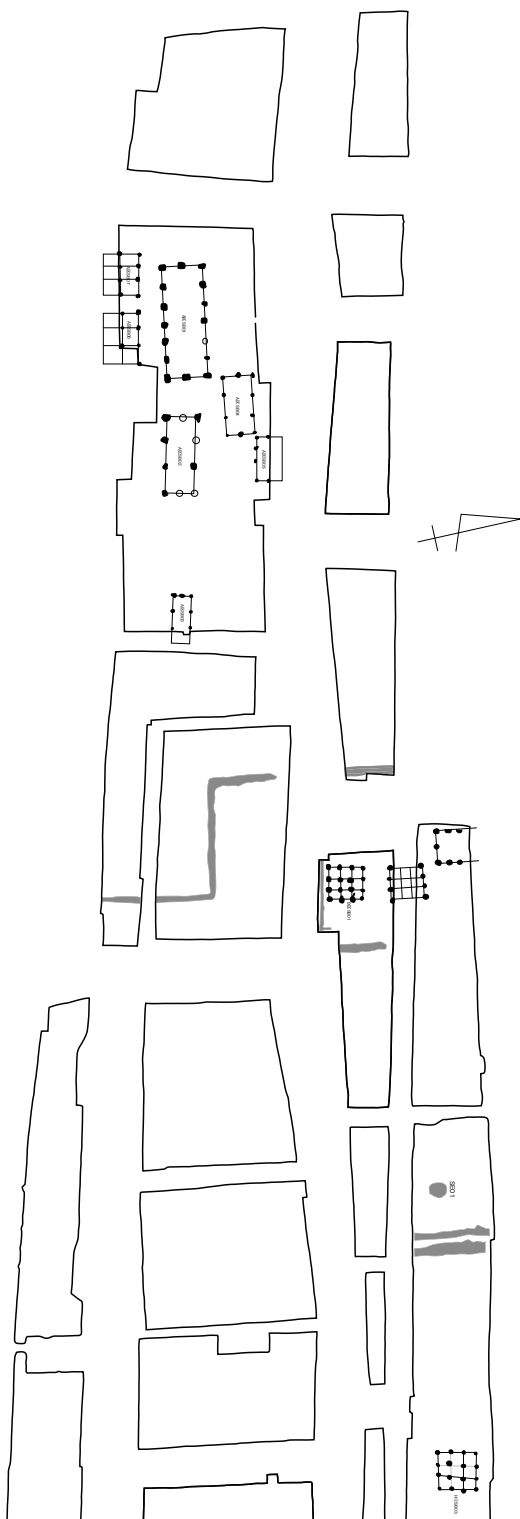
集落毎の各類型の消長を第54図にまとめる。第58図はこれを基に各類型の消長と系譜関係を模式化した。時間的には、7世紀中葉には2A類が出現し、7

世紀後葉には2A類に大きな影響を与えたと考えられる1類が現れる。2A類の存在を重視すれば、1類は7世紀中葉に遡る可能性も否定できない。2A類は10世紀前葉まで継続しながら、簡略化した2B、5A、5B類をそれぞれ生み出している。5類が集落の部分的な



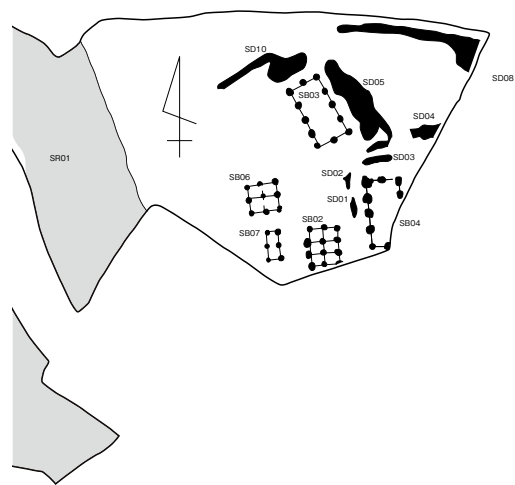
第 48 図 4類の諸例

5A 類

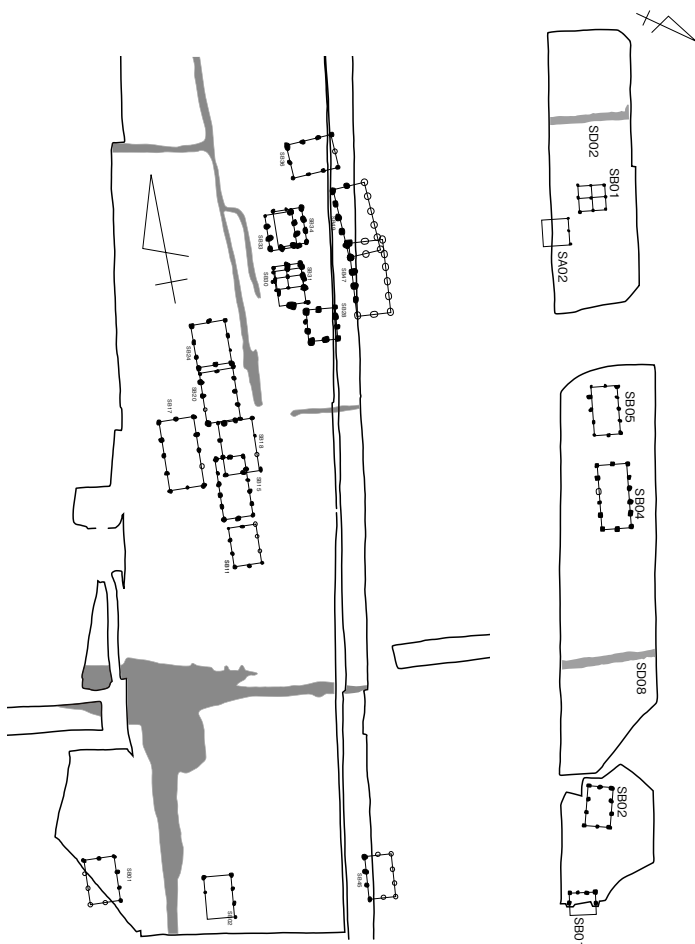


前田東・中村遺跡②(8世紀中葉～後葉)

5B 類

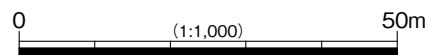


川北遺跡②(7c末～8c初頭)



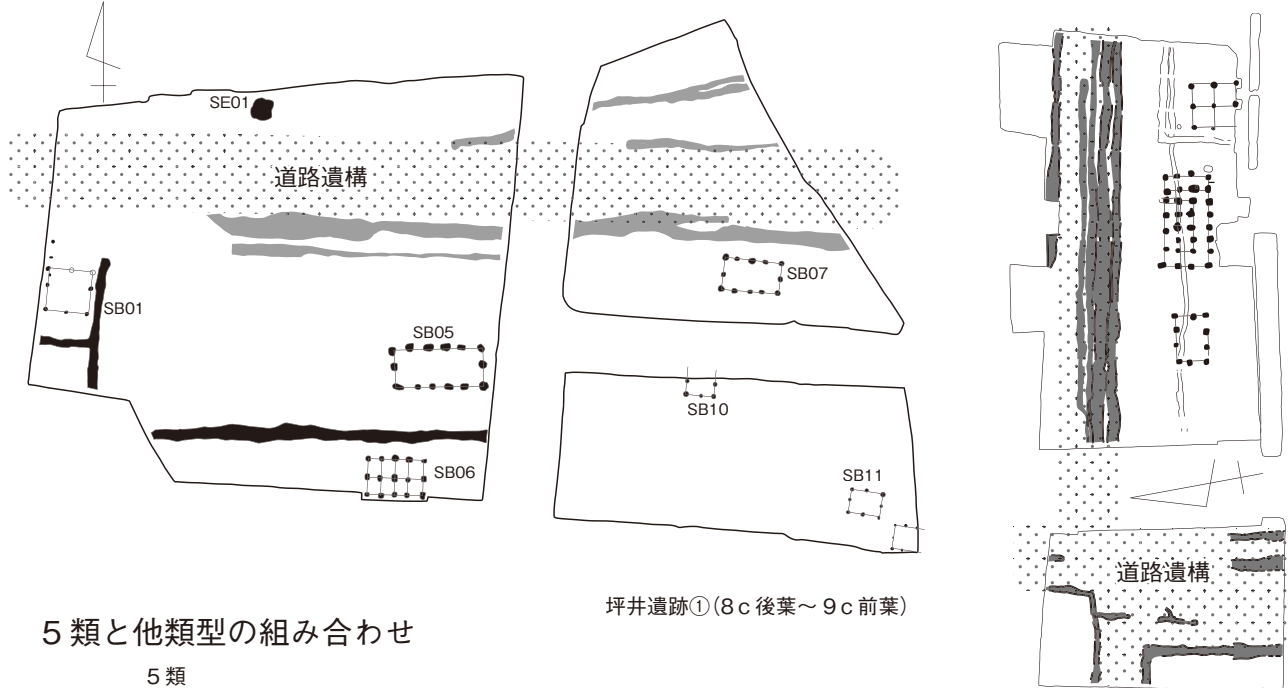
正箱遺跡③(9c後葉～10c前葉)

津森位遺跡②(8c後葉)



第 49 図 5 類の諸例

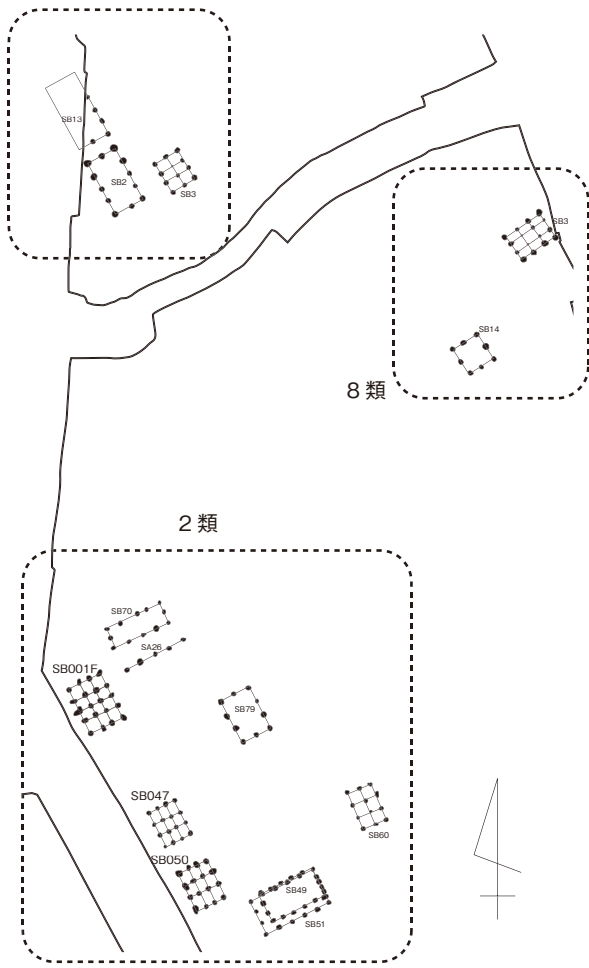
5 類に似た事例



坪井遺跡①(8c 後葉～9c 前葉)

5 類と他類型の組み合わせ

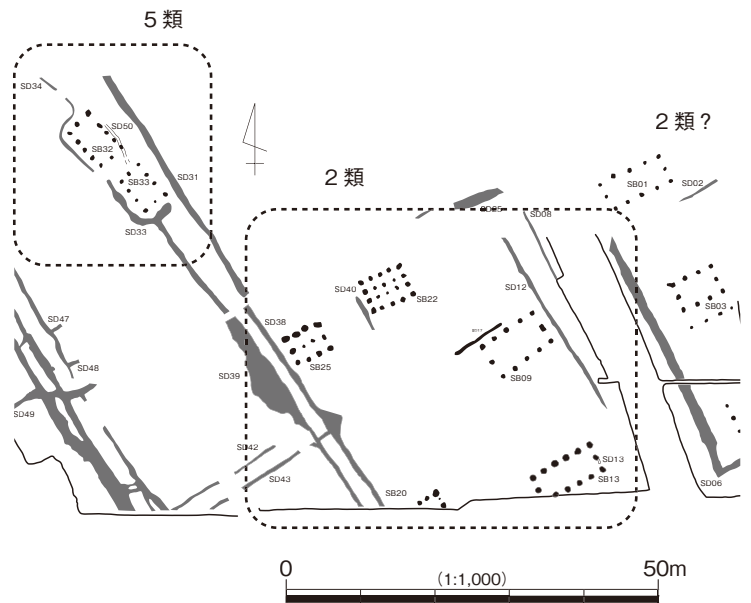
5 類



2 類+5 類+8 類

川津一ノ又遺跡⑧(8c 後葉～9 世紀前葉)

多肥北原遺跡①(9c 後葉～10 世紀前葉)



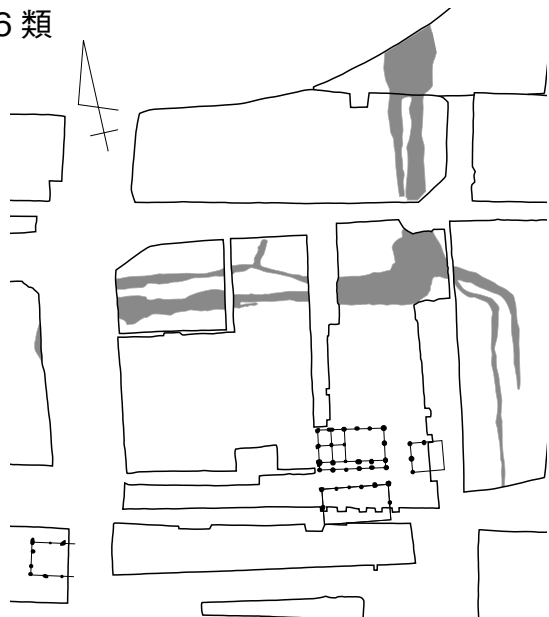
2 類+5 類

稲木遺跡④(7c 末葉～8c 初頭)

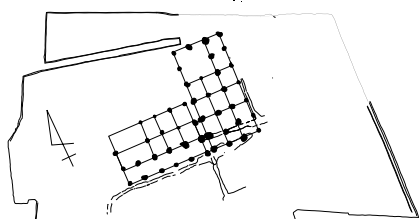


第 50 図 5 類(特殊)と5類と他類型の組み合わせ諸例

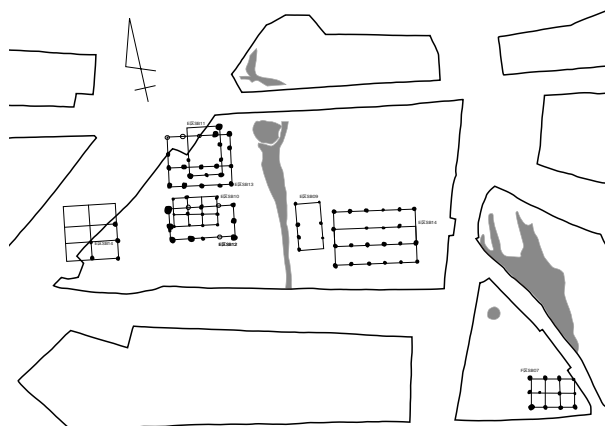
6類



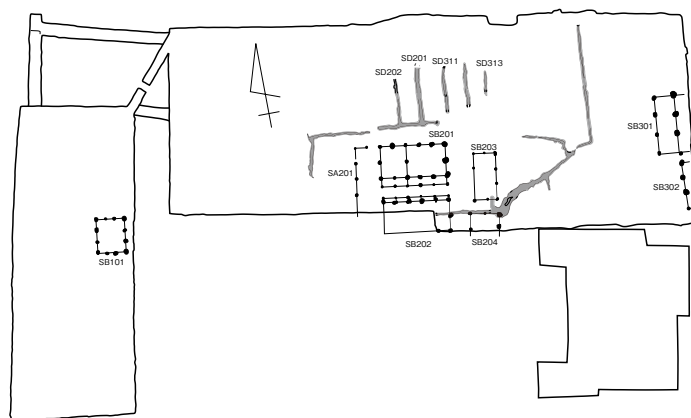
前田東・中村遺跡③(9c 後葉～10世紀前葉)



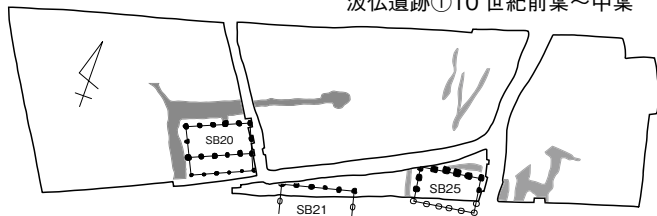
西村遺跡①(10c 中葉～10c 後葉)



前田東・中村遺跡④(10c 中葉～11世紀前葉)

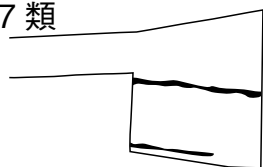


汲仏遺跡①(10世紀前葉～中葉)

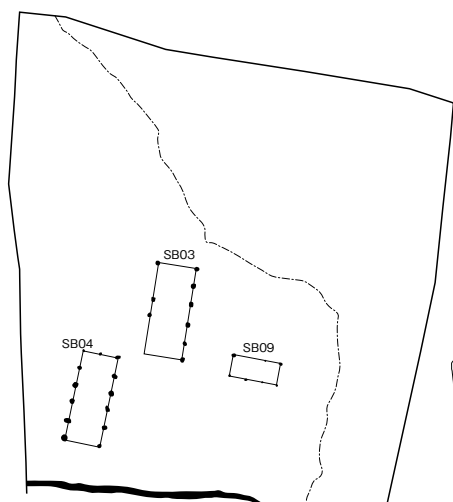


買田岡下遺跡①(9c 中葉～後葉)

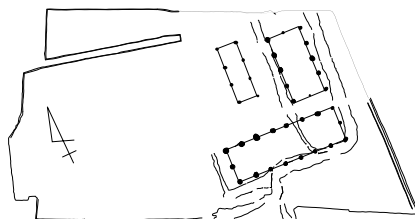
7類



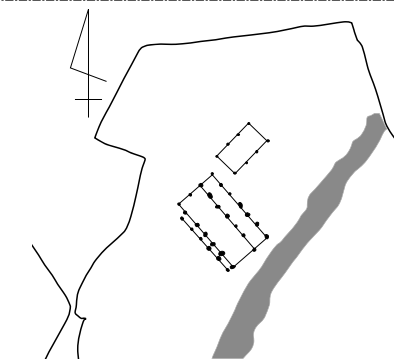
下川津遺跡⑦(11c 前葉)



西村遺跡②(10c 末葉～11c 前葉)



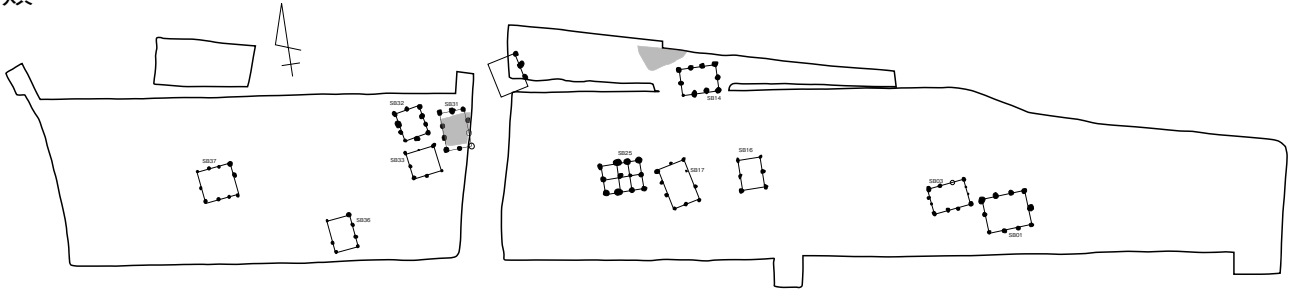
川津東山田 I ①(10世紀後葉～11世紀前葉)



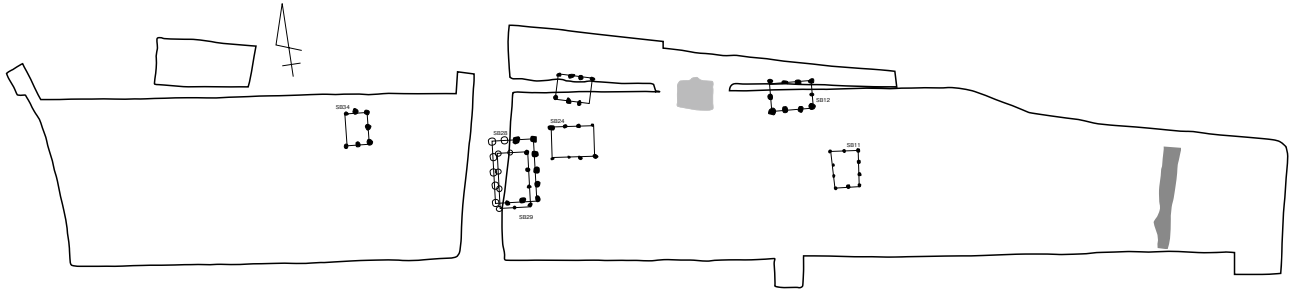
0 (1:1,000) 50m

第51図 6・7類の諸例

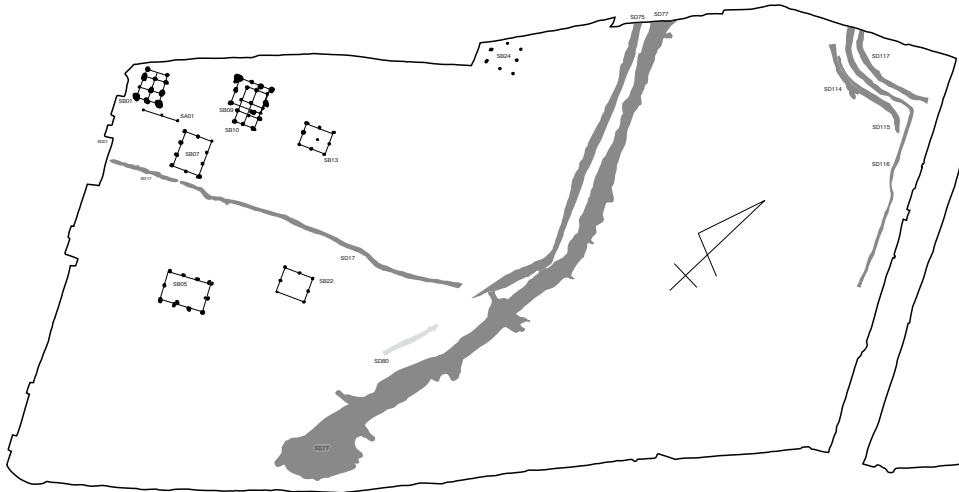
8類



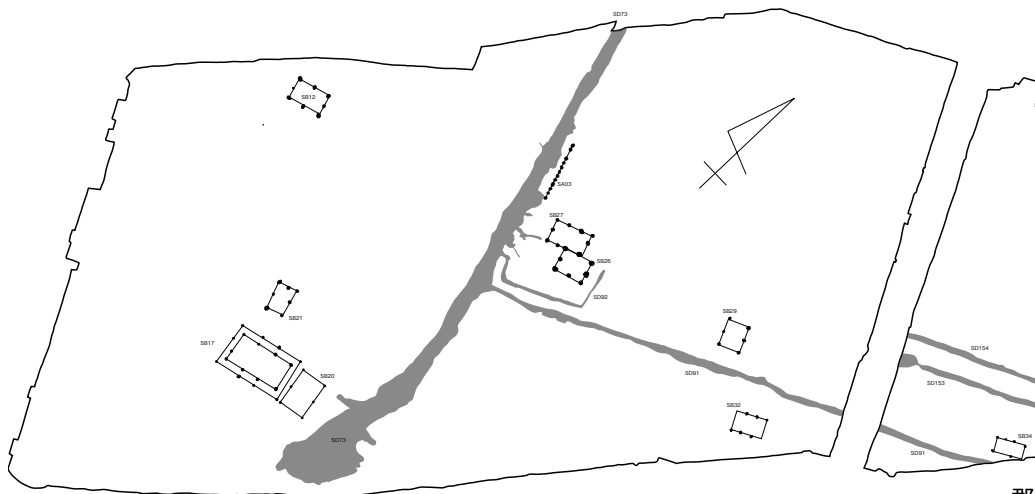
南天枝遺跡 (7c 中葉～後葉)



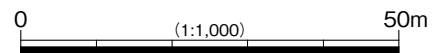
南天枝遺跡②(7c 末葉～8c 初頭)



郡家原遺跡③(8c 前葉～後葉)

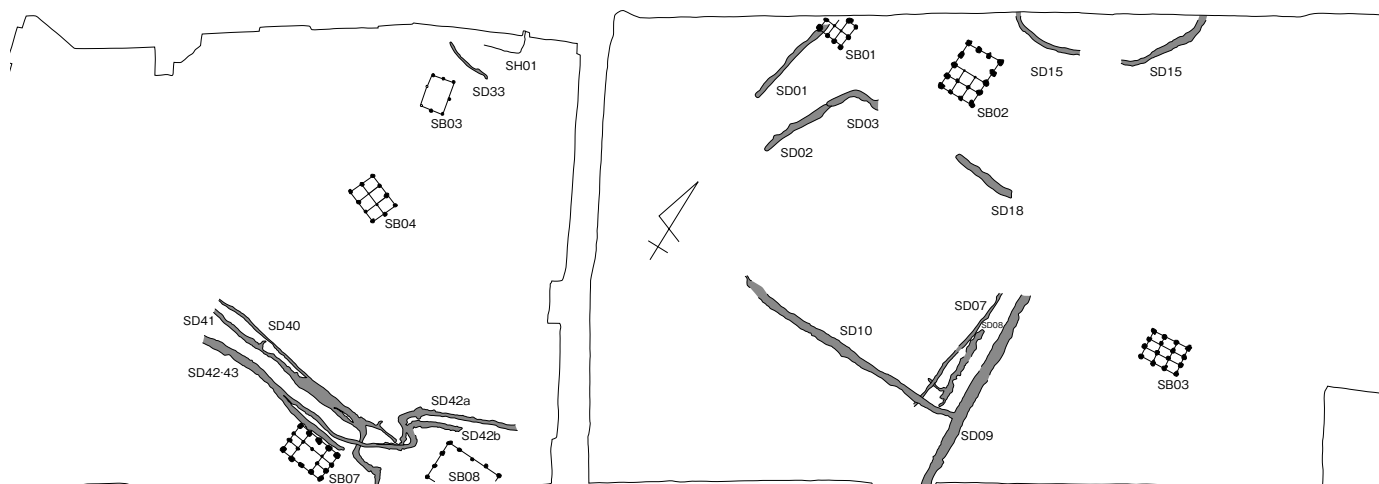


郡家原遺跡④(9c 後葉～10c 前葉)

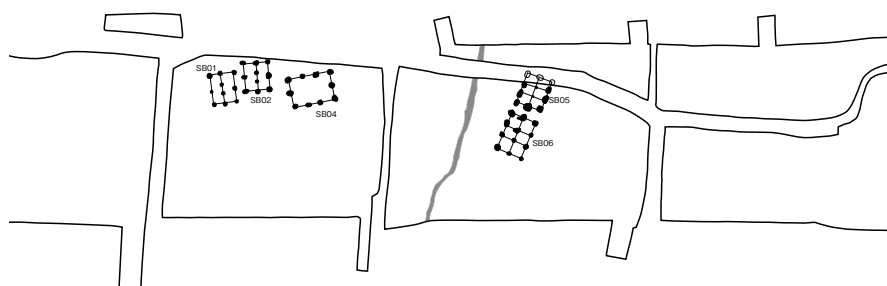


第 52 図 8類の諸例 (その1)

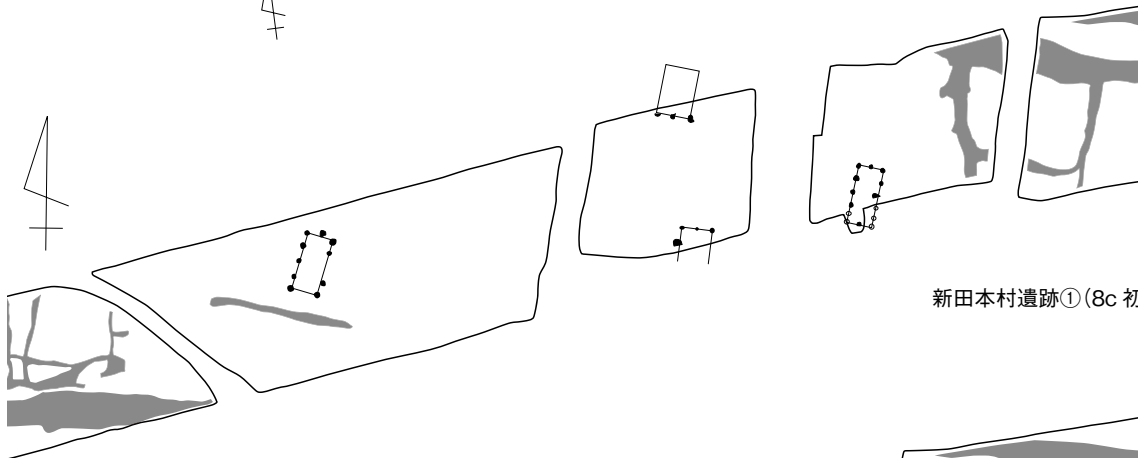
8類



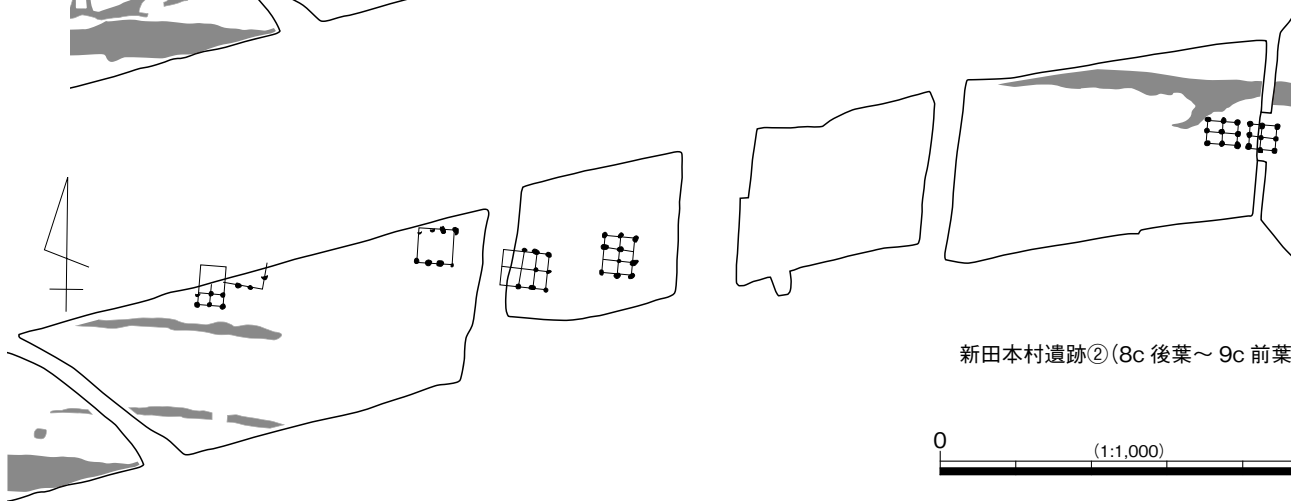
郡家一里屋遺跡①(7c 中葉)



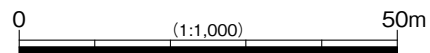
尾端遺跡①(7c 中葉)



新田本村遺跡①(8c 初葉～中葉)



新田本村遺跡②(8c 後葉～9c 前葉)



第 53 図 8類の諸例 (その2)

遺跡名	7c			8c			9c			10c			11c					
	中葉	後葉	末葉	初頭	前葉	中葉	後葉	末葉	初頭	前葉	中葉	後葉	末葉	初頭	前葉	中葉	後葉	末葉
稲木北 1614					1類													
					8%													
稲木B 5728	4類★		2B類	4類														
	2%		2%	2%														
金蔵寺下所 6616			4類★	4類														
			2%	1%														
郡家一里屋 19198	8類★									8類								
	1%未満									1%未満								
郡家原 14896	8類★				2B類+3類					8類								
	1%未満				1%					1%未満								
津森位 1764					8類		5B類					3類?						
					1%未満		3%					2%						
下川津 58055	2A類	2A類★+3類	2A類								3類		7類					
	1%未満	1%未満			1%未満						1%未満		1%未満					
川津一ノ又 172667	4類	4類	2A類★	3類		2A類		2A類		3類								
	1%未満	1%未満	1%未満	1%未満		1%未満		1%未満		1%未満			1%未満					
川津東山田 I 7262						8類		8類(鍛冶工房)		7類								
						1%未満		1%未満		1%未満								
買田岡下 5060								6類	6類?									
								1%未満	1%未満									
讃岐国府 1515		1類★	1類	1類	1類	1類	1類	1類	1類	1類	1類	1類	1類	1類	1類	1類	1類	1類
		13%	6%	7%	6%	8%												
兀塚 3610		3類★	3類															
		2%	2%															
正箱 4665						2B類		5B類		3類								
						4%		4%		2%								
小山西谷・新田本村 7330	8類★		8類		8類		8類		8類		8類?		8類?					
	1%未満		1%未満		1%		1%		1%		1%未満		1%未満					
汲仏 2904										6類								
										2%								
前田東・中村 29271			4類	5A類	8類?6類?	6類	6類	6類	6類	6類	6類	6類	6類	6類	6類	6類	6類	6類
			1%以下	1%以下	1%未満	1%未満	1%未満	1%未満	1%未満	1%未満	1%未満	1%未満	1%未満	1%未満	1%未満	1%未満	1%未満	1%未満
南天枝 3385	8類	8類★																
	3%	1%																
尾端 4467	8類	8類★	8類															
	1%	1%	1%未満															
坪井 5187						5A類に類似												
						1%												
西村 1577												6類	7類					
												3%	2%					
川北 5561			4類(★?)	4類														
			1%	1%														

※讃岐国府は開法寺東方地区のみ

柱間約 2.4m(8 尺) 以上の建物・柱穴列

★正方位指向の建物

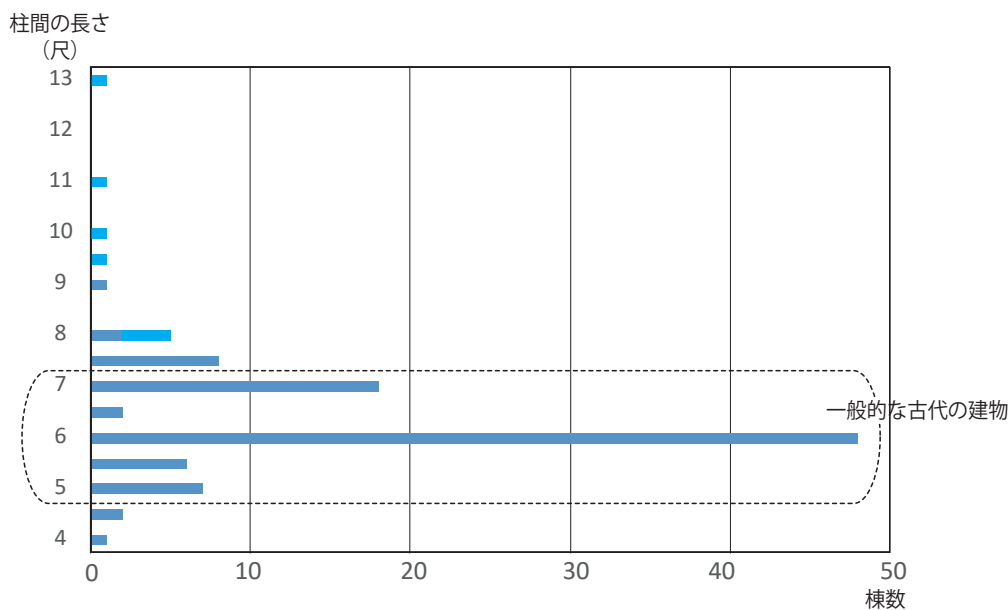
類型の下段には、調査面積(微高地)に対する掘立柱建物・柱列の遺構密度を表示
柱穴面積区分

柱穴一辺 1.1 ~ 1.5m → 1.5 × 1.5m = 2.25 m²

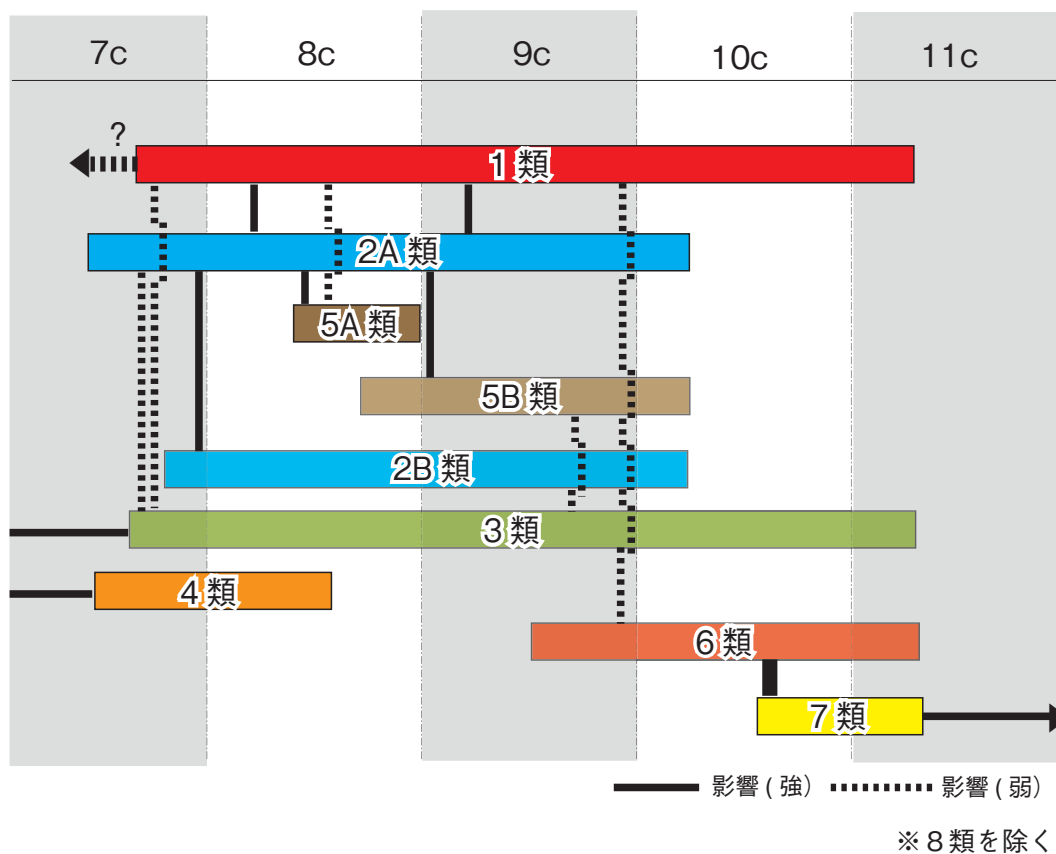
0.5 ~ 1m → 1 × 1m = 1 m²

0.5m以下 → 0.5 × 0.5m = 0.25 m²

第 54 図 遺跡毎の各類型の消長と遺構密度



第 55 図 県内の古代の建物の柱間と棟数
(奈良・平安時代 梁行 2 間以上 礎石建物を含む)



第 56 図 各類型の消長と影響関係

調査・確認であったとしても 2A 類が存在している限り、この想定は成立し得る。5A 類は、大型建物の柱間などに 1 類からの影響を想定する必要があるが、前田東・中村遺跡の 1 例のみであり、今後の検討が必要

だろう。3 類については、7 世紀中葉以降の長期間継続する類型である。類型設定の基準が曖昧であることも否定できないが、7 世紀中葉以前の集落形態に、1 類や 2 類の広場や部分的な建物配置の影響を一部に受

けつつ成立・継続したものと考えたい。4類は、積極的に1類、2類の影響関係は想定し難い。7世紀前葉以前の集落形態との関係で検討を進める必要がある。

6類は9世紀中葉を上限とする類型であり、廂付大型建物の存在を重視すれば1類との影響関係を想定できる。しかし、建物配置や規格性、主屋的な大型建物に床束をもつ点は大きく異なる。現状では部分的に1類の影響を受けつつ、9世紀中葉を初現とする新たな類型と考えたい。7類は、6類に併存した大型建物が絞り込まれ主屋が明確化するもので、西村遺跡の事例から両者は強い系譜関係にある。7類については、更に後述する。8類については、小規模散在型として一括したことや、各類型に付随することは明らかなので、ここでは取り上げない。

こうした展開をみせた各類型の動態は、讃岐国府や下川津、川津一ノ又、正箱遺跡を除いて、比較的短命なものが多く、佐藤竜馬が指摘したように、讃岐国府を除いて11世紀中葉には廃絶する(佐藤2000b)。讃岐国府の継続性がかなり異質に映っている。

次に、遺構密度と各類型の関係を検討する。遺構密度の算定方法は第54図下段に示す。讃岐では8世紀前葉まで堅穴建物が少数残存するが、その多くは7世紀中葉～後葉に消滅し掘立柱建物に転換するため、遺構密度の算出には掘立柱建物(柱列)の柱穴面積を中心に算出した。まず、1類は6～13%の高率を示す。また、柱間8尺以上の大型建物(柱列)が集中する点は、1類の階層性を十分に示す。特に、讃岐国府が一貫して高率を保っていることは、類型区分に対応したものとなっている。

最小構成単位とみられ小規模散在型とした8類は1%未満が主体の当然の結果を示すといえるが、2～7類では有意なものとはなっていない。この点は逆に集落占地可能な微高地が高大であったとしても、地形に合わせて建物遺構を展開させるのではなく、当初から集落規模などの造営プランがあったと考えざるを得ない。つまり、微高地上を広く範囲にいくら調査しようとも、建物群の中心となる範囲は限られていて、空白地が増えていくだけなのである。この好例として2類が連続と営まれた下川津遺跡、川津一ノ又遺跡を挙げることができる。1類程の規格性がない集落であっても、一定の目的性の下で造営・配置されている可能性があり、この目的性こそが古代集落の特性であり、官衙や8類の一般的集落を除く官衙的と表現された様々な類型を現出させていると考える。

4 6・7類と中世方形館との関係

7類の特徴として、主屋が明確になることや、西村

遺跡の事例から6類からの強い関係性をもつことは既に述べたとおりである。次に6・7類と、次時代の集落の中核となる中世方形館の関係を検討する。

讃岐にみられる中世前半期の方形館の特徴は、溝により圍繞された空間に、中央の明確化された主屋の周囲に複数の副屋が配置される。溝によって圍繞されること以外に、建物構成から機能分掌が進んでいることが特性として挙げられる。

ここで改めて6・7類の特徴をみってみる。6類は廂付きあるいは床束を備えた2～3棟の大型建物を並置し、周囲に副屋と見られる数棟小型建物をコンパクトに配置する。7類は1・2棟の大型建物の近接した位置に1棟副屋が付属する。6類との共通性は、廂付きの大型建物に床束をもつものがあり、周辺の副屋の配置が疎らであることも影響して大型建物に集落経営者の居住機能が強く意識、収斂した類型と言える。

第57図下段の西打遺跡B2区(11世紀末～12世紀前半)の事例は、溝で圍繞された空間に主屋の周囲に複数の副屋が配置される。後出する空港跡地遺跡F地区区画1は、区画内部が細分化され、中央の主屋を中心に副屋が整然と配置される。こうした建物構成や配置からは、11世紀中葉から11世紀後葉の断絶期を経て、7類の1・2棟の大型建物が1棟に絞りこまれ、溝により圍繞された空間に周辺の数棟の小型建物が集約されたことで、これらの中世前半期の方形館が出現すると考えられる。また、6類にみられる床束をもつ大型建物が中世方形館の主屋に多く採用されることとも矛盾しない。

以上の点から、6・7類は、古代の途中で出現し、中世前半の方形館に繋がる類型と考える。

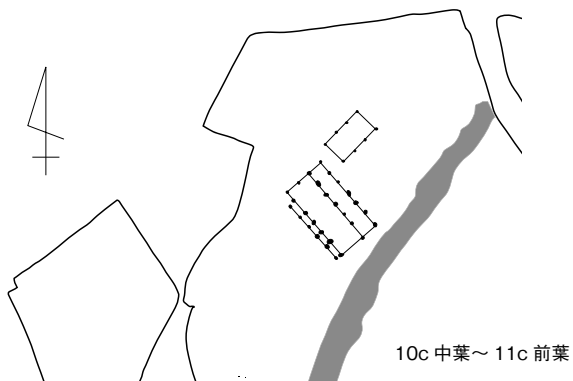
5 まとめ

最後に本論での作業で明らかになった点をまとめておく。

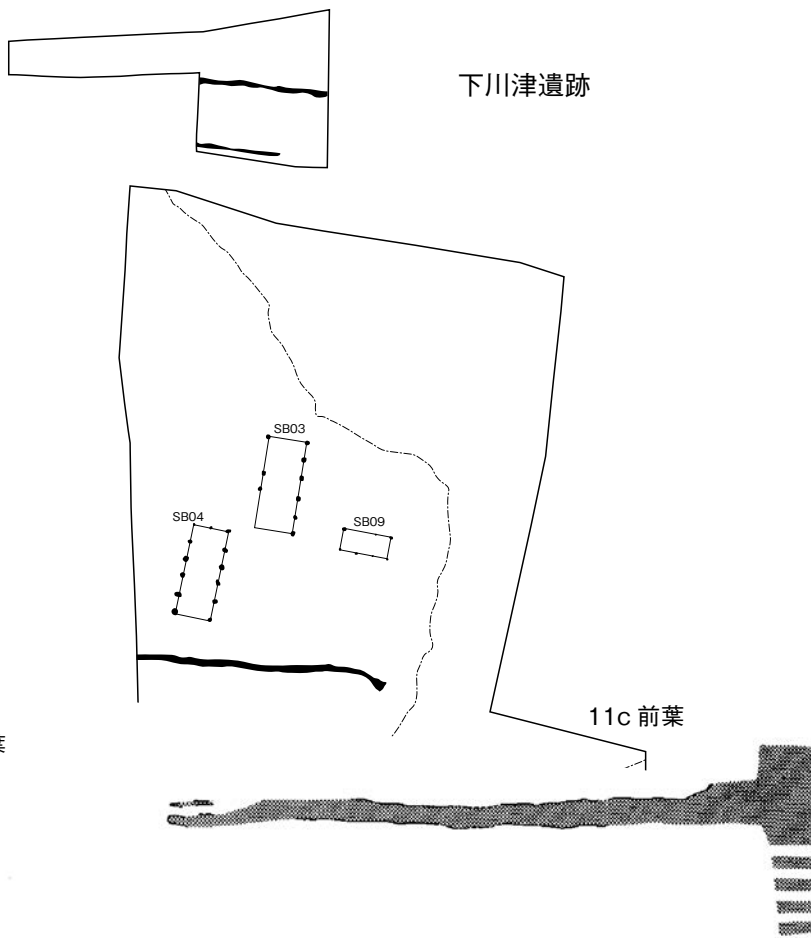
類型分類の視点で行った類型化は、官衙的要素を備えた7世紀中葉の出現に係る上限時期を設定できる1類を中心に、2A類等の様々な官衙的集落が出現する。1類が讃岐国府など限定的な在り方を示すのと対照的な在り方を示している。また1類の中で讃岐国府は長期間継続するとともに、遺構密度や内部の建物に大きな変化はなく、7世紀後葉から8世紀初頭の先行官衙の評価は更なる位置付けが必要となるが、讃岐の古代集落全体の中で中心的な位置を占めると考えられる。今回は集落、主に建物群の類型の作業であったが、ここに官衙系遺物とされる硯や国産陶器の保有量を重ねれば、その位置付けがより鮮明となろう。

6・7類とした類型は、1類の大型建物に影響を受け

川津東山田遺跡

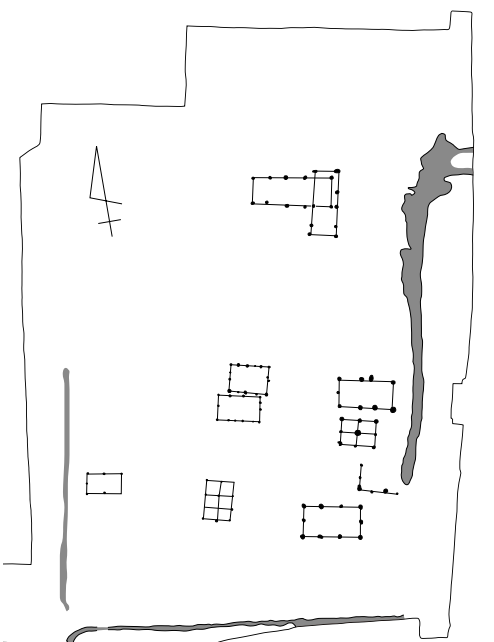


下川津遺跡

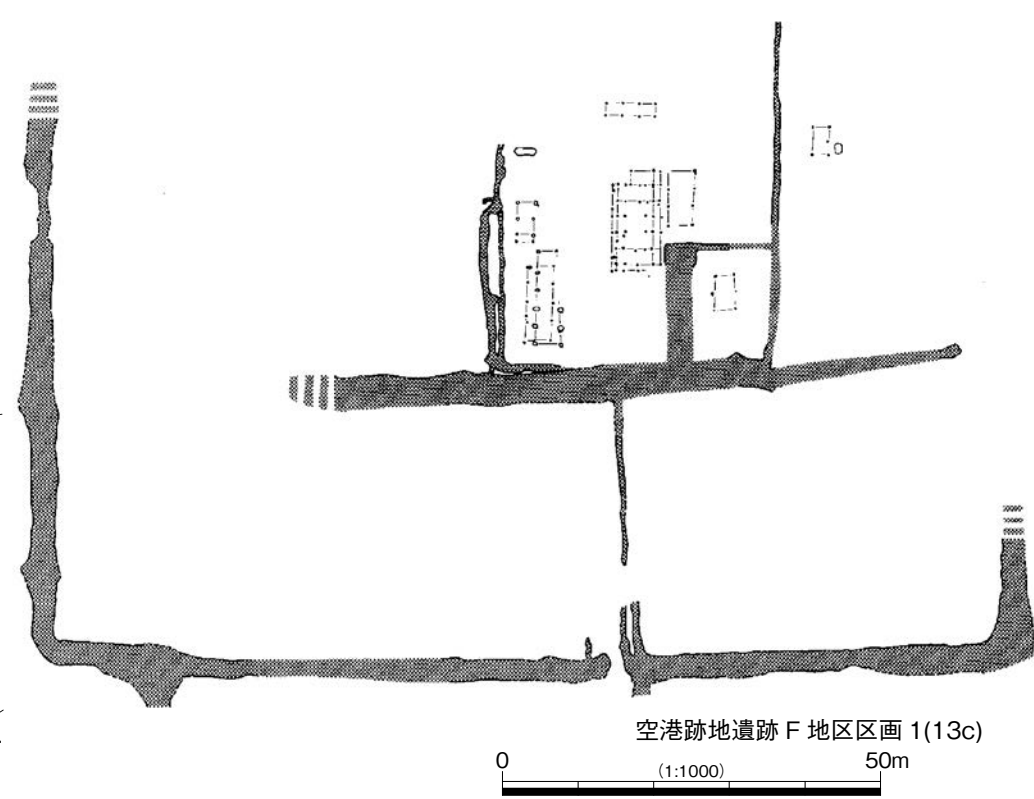


西村遺跡

10c 末葉～11c 前葉



西打遺跡 (11c 末葉～12c 前半)



第 57 図 7 類と中世方形館の比較

つつも古代期の途中で出現する。その時期は、買田岡下遺跡の9世紀中葉を時間的上限とし、西村遺跡、川津東山田遺跡Ⅰの事例から10世紀末葉～11世紀前葉に7類へと変遷すると考えられる。居住機能を重視した主屋を中心とした構成要素は、11世紀の断絶期を挟んで中世前半期の方形館に通ずるものがあり、7世紀中葉以降に出現する1類など官衙系の集落とは異なった系譜であると考えられる。しかし、その一方で、6類の集落には、石帯や帯金具などの前代からの官衙的な品々を保有し続けており、本段階に官人層として地方支配の末端に連なりながらも新たな階層が出現したとみるべきであろう。

以上、古代集落の変遷の画期は、1類の出現時期の上限である7世紀中葉、中世への繋がりを重視した視点では、6類の出現の上限時期である9世紀中葉を区分点として捉える。

佐藤竜馬 1998「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題-南海道を中心に-』古代学協会四国支部第12回大会発表資料

佐藤竜馬 2000a「讃岐における平安期の土器研究」『中近世土器の基礎研究XV』日本中世土器研究会

佐藤竜馬 2000b「第2章第2節中世遺跡群の動向」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会

佐藤竜馬 2016「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業(1)9世紀前葉～11世紀前葉の供膳器種」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成26年度』

西村尋文 1990「下川津遺跡における6～8世紀の集落構造と動向」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会他

広瀬和雄 1978「古墳時代の集落類型」『考古学研究』97号 考古学研究会

広瀬和雄 1983「古代の開発」『考古学研究』118号 考古学研究会

広瀬和雄 1982「大園遺跡における集落の展開」『大園遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会

広瀬和雄 1986「中世への胎動」『岩波講座日本考古学6 変化と画期』岩波書店

山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

水野正好 1977「第5章近江国衙総論」『滋賀県文化財調査報告書第6冊』滋賀県教育委員会

香川県教育委員会他 1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』

香川県教育委員会他 1993『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第13冊 郡家原遺跡』

香川県教育委員会他 1993『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第12冊 郡家一里屋遺跡』

香川県教育委員会 1994『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 正箱・薬王寺遺跡』

香川県教育委員会他 1994『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第10冊 金蔵寺下所遺跡 西碑殿遺跡』

香川県教育委員会他 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 前田東・中村遺跡』

香川県教育委員会他 1997『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第26冊 川津一ノ又遺跡Ⅰ』

香川県教育委員会 1997『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小山谷遺跡Ⅰ』

香川県教育委員会 1998他『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第30冊 川津一ノ又遺跡Ⅱ』

香川県教育委員会他 1999『汲仏遺跡 香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財調査概報 汲仏遺跡 平成10年度』

香川県教育委員会他 2000『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』

香川県教育委員会他 2001『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第38冊 川津東山田遺跡Ⅰ区』

香川県教育委員会 2002『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 西打遺跡Ⅱ』

香川県教育委員会他 2002『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第40冊 坪井遺跡』

香川県教育委員会 2003『県道高松長尾大内線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 尾端遺跡』

香川県教育委員会他 2003『県道富田西志度線道路改良事業及び県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 寺田・産宮通遺跡 南天枝遺跡』

香川県教育委員会他 2004『一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊 買田岡下遺跡』

香川県教育委員会他 2004『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第51冊 川北遺跡・三殿出口遺跡』

香川県教育委員会他 2005『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第55冊 前田東・中村遺跡Ⅱ』

香川県教育委員会他 2006『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第56冊 前田東・中村遺跡Ⅲ』

香川県教育委員会 2006『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 小山・南谷遺跡Ⅱ』

香川県教育委員会 2009『県道丸亀詫間豊浜線(観音寺工区)及び県道多度津丸亀線(丸亀工区)緊急地方道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高屋条里遺跡 津森位遺跡』

香川県教育委員会 2014『県道三木国分寺線道路改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 はげ塚遺跡』

香川県教育委員会 2015『県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥北原西遺跡』

香川県埋蔵文化財センター 2015「西村遺跡」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成25年度』

高松市教育委員会 2006『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書第3冊 新田本村遺跡』

香川県埋蔵文化財センター年報

平成 28 年度

平成 30 年 3 月 14 日 発行

編集・発行 香川県埋蔵文化財センター

〒 762-0024

香川県坂出市府中町南谷 5001 番地 4

電 話 (0 8 7 7) 4 8 - 2 1 9 1

F A X (0 8 7 7) 4 8 - 3 2 4 9

印 刷 ワールド印刷株式会社